

# VIEW21

## 特集

# 学校の仲間と語る 「私たちはなぜ学ぶのか？」

「高校生未来プロジェクト」学校実施型が示す学びの意欲向上のヒント

指導変革の軌跡

学校改革◎兵庫県立神戸高校

生きたデータの  
徹底研究

1年生1学期 保護者への意識付け

半歩未来を考える  
教育オピニオン

「JMOOC」がもたらす高大接続の新たな形とは？

2014  
June

6月

高校版  
Volume

2

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

豊かな師弟関係が伝統校の文化を継承する  
熊本県立熊本高校◎原由大賢

## 4 特集

学校の仲間と語る  
「私たちはなぜ学ぶのか？」

「高校生未来プロジェクト」学校実施型が示す学びの意欲向上のヒント

## 6 「高校生未来プロジェクト」、その概要と成果

学びの意欲を高める新たなモデルを目指す

## 10 学校実施型への挑戦

同じ高校の生徒同士が学びについて語り合う 新しい「未来PJ」が始まる

## 14 生徒インタビュー

学校の仲間と学びの意味を語り合う

「高校生未来プロジェクト」で学びの意欲はどう変化したか  
埼玉県立大宮光陵高校 / 山口県・私立慶進中学・高校

## 18 座談会

自分を語る場を学校につくり 生徒の学びの意欲を高める

埼玉県立大宮光陵高校校長 久保島昌一 / 東京都・私立白梅学園高校 中村雅一 /  
大阪府・私立初芝富田林高校 前中マリヤ / 山口県・私立慶進中学・高校 西山智彦

## 23 寄稿 オックスフォード大教授 / 元東京大教授 荻谷剛彦

## 24 特別レポート

小・中・高の教師が共に語り オピニオンをつくる  
「Teachers' cafe」第2回ワークショップ報告

## 26 指導変革の軌跡

兵庫県立神戸高校

学校改革◎伝統校が更なる信頼醸成・実績向上に向けて改革に着手

## 30 生きたデータの徹底研究

1年生1学期 保護者への意識付け

## 34 半歩未来を考える教育オピニオン

「JMOOC」がもたらす高大接続の新たな形とは？

九州大理事・副学長、日本オープンオンライン教育推進協議会副理事長◎安浦寛人

## 38 未来をつくる大学の研究室

人間の感性と生地なかつちの属性を分析し 消費者が求める衣服を作り出す

信州大大学院 理工学系研究科 高寺政行研究室

## 42 VIEW'S REPORT

2014年度、文部科学省の新事業スタート

指定校同士で情報共有し活性化を図る「スーパーグローバルハイスクール」

筑波大学附属高校副校長 日下部公昭 / 筑波大学附属学校教育局長次 新津勝二

## 44 【告知】ウェブで参観できる「シリーズ 授業大公開」がオープン！

## 48 Reader's VIEW

\*本文中のプロフィールは  
すべて取材時のものです。  
また、敬称略とさせていただきます  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、  
複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

### 理想の教師像に出会った



教職5年目  
に、2校目の勤務校として熊本  
県立熊本高校に

赴任しました。全国有数の進学校に勤めることになった私に、周囲は「熊高では、自分の小さな物差しにこだわらず、先輩から学ぶ素直さが大切」とアドバイスしてくれました。私は「自分は経験が乏しいのだから、分からないことはどんどん聞く」と心に誓いました。

実際、1年目から大いに鍛えられました。熊本高校では、所属学年に関係なく、3年生の内模試の作問を年に数回担当することになっており、それが「熊

# 豊かな師弟関係が 伝統校の文化を継承する

熊本県立熊本高校 原田大賢

全ての学校には、それぞれに果たすべき使命がある。そして、それを途切れることなく伝えていく教師の存在があつてはじめて、使命は文化となつて校内に根付いていく。先輩から全てを学ぶことを決意した原田先生が、文化を継承した10年を振り返り、次代に伝える決意を語る。

高の教師」としての登壇門になっていきます。翻訳が出ていない英文を素材に、全くオリジナルの問題を作成するのは非常に大変で、2学年担任となった私も4月から早速作問に取り組みましたが、指導役の先輩に何度もやり直しを命じられました。

英語科全体での検討会に提出できるレベルの問題になるまでに約1か月掛かり、この間に体重は5キロ減りました。

作問に加えて日々の教材研究、更には部活動の指導と、仕事は山積みでしたが、そのような状況の中で精神的な支柱となつてくださったのが、2学年主任だった山本朝昭先生です。教科指導と進路指導の両方で生徒の熱烈な支持を集める山

本先生の周りにはいつも生徒がいて、どんな相談にも的確なアドバイスをされていました。また先生は、校外の研究会にも積極的に参加して人脈を広げるなど、何でもスマートにこなせる先輩でした。私はよく生徒に「熊高では勉強だけではダメ。あれもこれもと欲張ろう」と話して

いました。山本先生は私にとって理想の熊本高校の教師像だったのです。私はすぐに「山本先生についていこう」と思うようになりまし。職員室では、隣席の山本先生が生徒に掛ける言葉に耳を傾け、指導の真似をすることから始めました。

### 先輩に学んだから今がある

「仕事と宴席は断らない」。こ

れは当時も今も変わらない私の信念です。どちらも声を掛けてもらえることがありがたいですし、断つてしまうと自分の小さな枠の中でしか成長できなくなると思うからです。

とはいえ、全てに自信を持つて臨んでいたわけではありませ。赴任1年目の終盤、次年度校内人事の希望調査の際には、私は3年生の担任を望んではい

ましたが、その重責に不安を感じ、希望するかどうか躊躇してしまいました。そんな私に山本先生は、「3学年担任が希望だと書いたらいいよ」と背中を押してくださいました。山本先生は、私に経験が乏しいことを承知の上で仕事を与えようとしてくれる。だったらやるしかない

### 先輩教師の言葉

先輩から学ぶ  
若手の姿勢が  
学校文化を継承する

熊本県立済々黉高校 副校長  
山本朝昭



赴任1年目  
から2学年担任となつた原  
田先生には、

周囲の思いを察知して先回りして動いてくれる行動力がありませんでした。それでも、赴任して最初の1、2年は苦労したことでしようが、原田先生は用意されたハードルを越えるのが早かつたと思います。校内模試の作問に取り組んでいる時も、原田先生の表情には悲壮感などなくエネルギーッシュで、むしろ新しい環境での挑戦を楽しんでいる印象さえありました。

赴任2年目に3学年担任になるのは、熊本高校ではあまり例のないことではありましたが、原田先生には伸びしろがありましたし、次代の熊本高校を担う人材づくりのため

左はらだ・だいけん 英語科。熊本県立河浦高校を経て、熊本高校へ。赴任10年目。英語科主任。進路指導部副部長。

右やまもと・のりあき 英語科。熊本県立八代高校、熊本高校などをを経て、高森高校で教頭を務める。その後、清々養高校へ。副校長。

撮影◎熊本高校にて



し、やる以上は先輩の顔に泥を塗るわけにはいかない。そう思いました。

3 学年担任としての1年間は分からないことの連続で、先輩方に聞いてばかりでした。もちろん、教わったことは自分の頭で理解した上で生徒に伝えようとなりましたが、それでもどこか自分の言葉ではないという気がすることもありました。今思えば

十分な指導力があつたとはいえず、きっと生徒にも苦勞を掛けた1年だったと思います。

しかしそのおかげで、翌年度に1学年担任になった私は、3年生像をリアルにイメージしながら「熊高での3年間」を自分の言葉で生徒に語っていました。「一緒に3年生に上がろう」と声を掛けてくださった山本先生は、私に熊本高校の教師として

成長する場を与えてくれたのだと感謝しました。

10年前、「ここでは教師も自ら学ばなければいけない」という言葉を胸に、私は熊本高校に來ました。若かった私がやっていくためには、先輩方に多くを尋ねることが必要でした。山本先生を始め、多くの先生方の姿を追い、その言葉を聞き逃さぬようにしてきたことで、今の私

があるのだと思います。

社会が変化し、校務も多様化しているからこそ、不易と流行にも先輩から学ぶ姿勢は一層大切になっていると思います。熊本高校の生徒、そして教師はどうあるべきか、今は自分が若い先生方にいろいろなシーンで伝えていく立場になったのだと、その責任を実感しています。

にも早めに大きな役目を経験した方が良いと考えました。

とはいえ、教師にとって大切なのは目の前の生徒であり、生徒は教師の成長を待つてはくれません。学校はその時その時が勝負で、やり直しが利くものではありません。だから若手は、経験から学ぶことが出来ないのであれば、先輩から学ぶしかないのです。「経験を待たずに分かる力」を既に持っていた原田先生に、更に大きく育つために経験も早く積ませたいと思ったのかも知れません。

生徒は、手を掛ければよいというものではなく、度が過ぎるとかえって大きく育たない生徒もいます。そのような生徒に対しては、最初から手を掛け過ぎず、見守り、待つことが大切です。もちろん、ぐいぐいと引つ張り上げることで大きく育つ生徒もいますから、教師には、生徒の状況を見抜く力、指導のさじ加減が求められます。そうしたセンス、力は「こうすれば身に付く」と言語化できるものではなく、先輩を見たり、感じたりして獲得するものではないでしょうか。そうした一人ひとりの営みが、学校文化を継承していくのだと思います。

# 学校の仲間と語る

## 私たちは

## なぜ学ぶのか？

### 「高校生未来プロジェクト」学校実施型が示す学びの意欲向上のヒント

「生徒の学びの意欲の低下」という課題の解決策を考える材料の1つとして、本誌2013年6月号で、ベネッセ教育総合研究所が主催した「高校生未来プロジェクト（以下、未来PJ）」を紹介した。

未来PJに参加した高校生たちは、学びの意味や目的をテーマにした語り合いを通して、学びの意欲を高めたが、読者からは「学校という日常の場において同様の取り組みを行っても、学びの意欲は向上するのか」という声が多く寄せられた。そうした点について検証するべく、ベネッセ教育総合研究所は2013年度に全国4つの高校で未来PJを実施。そこでの生徒たちの変化を通して、再び、生徒の学びの意欲について考える。

### 「高校生未来プロジェクト」に対する読者の声

◎未来PJに効果があり、有意義な取り組みであることは、実施前からある程度、予測できたと思う。問題は、このような非日常の取り組みで変化するのではなく、参加者と同様の変化を、学校で遂げられるようにすることではないか。我々の目の前にいる生徒も、大きく変化できるものを内在している。それを発揮せずに終わらせてしまっていることを、強く受け止める必要がある。そこに生徒を学びに誘う根本的な解決策が潜んでいるような気がする。（岩手県）

◎「少人数のグループの方が話しやすい」という参加者の言葉や、初対面であっても勉強や進路について議論できたということが、学校生

活における生徒たちの、教師には見えない日常を示唆しているように感じた。授業、LHR、「総合的な学習の時間」など公的な場で、どんなテーマについても、生徒が自分の考えを発言し、他人の考えに耳を傾けられるような取り組みが非常に重要だと思った。（千葉県）

◎参加した高校生の言葉に、いろいろと考えさせられた。「何でも話せる雰囲気が学校にあるか」と言われれば、「ない」と答えざるを得ない。参加者は非日常的な場だからこそ本音を話せたのかもしれないが、教師が意識して何でも話せる環境を整えられれば、生徒は学びの意義を自ら見いだすことが出来るのだろうか。（和歌山県）

\*[VIEW21] 高校版2013年6月号特集について聞いた読者モニターへのアンケート結果（2013年6月にウェブとファクスで実施。有効回答数は64）より。

本号のテーマ

「学校」という日常の場において、  
生徒たちが学びの意味・目的を語り合うことは、  
学びの意欲の向上につながるのか？

「高校生未来プロジェクト」の追跡調査

「高校生未来プロジェクト」の参加者を追跡調査した結果から、学びの意味や目的を本気で語り合うことは、  
高校生の学びの意欲を向上させるだけではなく、向上した意欲を持続させる効果もあると分かった。

「高校生未来プロジェクト」、その概要と成果 [P.6 ~ 9]

高校生が学びの意味・目的を本気で語り合う機会を、  
「学校」という日常の場に設けても、学びの意欲は向上するのか？

ベネッセ教育総合研究所による実証実験

◎4つの高校で「高校生未来プロジェクト」型のワークショップを実施

協力校 埼玉県立大宮光陵高校／東京都・私立白梅学園高校／  
大阪府・私立初芝富田林高校／山口県・私立慶進中学・高校 学校実施型への挑戦  
[P.10 ~ 13]

◎参加した生徒の変化

生徒インタビュー [P.14 ~ 17]



「自分の意見に反論されたことは、  
新鮮で面白い体験でした」  
埼玉県立大宮光陵高校2年生 新間貴彬



「ワークショップの後、  
自然に机に向かう自分に驚きました」  
山口県・私立慶進中学・高校5年生 矢儀文博



「知識の大切さに気が付き、  
人と話すことが楽になりました」  
埼玉県立大宮光陵高校2年生 河野帆夏



「みんなと話し合えたことそれ自身が、  
自分の自信になっています」  
山口県・私立慶進中学・高校5年生 秋月真由子

◎実施した教師の気付き

座談会 [P.18 ~ 22]



「自分の考えを十分に表出できて、  
ようやく生徒の視線は  
他者へと向けられていく」  
埼玉県立大宮光陵高校校長 久保島昌一



「『人は、なぜ学ぶのか』を  
自分の言葉で語ることが、  
私たち教師には求められている」  
大阪府・私立初芝富田林高校 前中マリヤ



「入学直後、学びの意味を語り合うことは、  
学習意欲の向上や  
人間関係の構築につながる」  
東京都・私立白梅学園高校 中村雅一



「ワークショップは『これからは  
自分のことを語ってよいのだ』と  
生徒が気持ちを切り替える作業だった」  
山口県・私立慶進中学・高校 西山智彦

寄稿 「高校生未来プロジェクト」が示す、更なるターゲット オックスフォード大教授／元東京大教授 荻谷剛彦 [P.23]

# 「高校生未来プロジェクト」、その概要と成果

## 学びの意味を語り合い、学びの意欲を高める

近年、高校生の学びの意欲が低下していると指摘する教師は多い。ベネッセ教育総合研究所の調査でも、勉強の意味を見いだせず、「勉強しよう」という気持ちが出ない」「どうしてこんなことを勉強しなければならないのかと思う」と答える高校生がいずれも過半数を上回るなど、高校生の学びの意欲が低くとどまっていることが明らかになっている。また、「将来の進路は大学進学後に考える」という高校生も約5割に達しており、なりたいたい職業を高校時代

### ポスト3.11 高校生未来プロジェクト ～「学び」がボクらを、社会を変える～

#### ワークショップ概要

- 参加者** 全国の高校1～3年生 34人 (男子13人、女子21人)  
**期間** 2012年12月26日(水)～27日(木) 1泊2日  
**会場** 東京大 本郷キャンパス 福武ホール内 福武ラーニングスタジオ (東京都文京区)  
**募集方法** 学年を問わず、日本国内の高校、それに準ずる学校に在籍する生徒を募集。作文課題「あなたはこれからどんなことを、どのように学びたいと思いますか? 将来の社会貢献とつながりや、自分が大切にしている価値観を踏まえて、今の考えを書いてください」(800字程度)の内容により審査。募集期間約1か月で全国から100人を超える応募があった。  
**参加費** 無料 ※宿泊費、開催中の食事代を含む。交通費は一部補助。  
**企画協力** オックスフォード大教授/元東京大教授 荻谷剛彦先生  
**運営協力** 株式会社もくてぎ代表/ハタモク代表 與良昌浩氏、One&Only 代表/ハタモク副代表 生田早智江氏  
**主催** ベネッセ教育研究開発センター(現・ベネッセ教育総合研究所)「高校生未来プロジェクト」事務局

#### ワークショップの大まかな流れ

- |       |       |   |
|-------|-------|---|
| 1日目   | 13:00 | ワークショップ開始   |
|       | 13:20 | 自己紹介、参加理由、期待などを共有                                       |
|       | 13:35 | 大切にしている価値観、問題意識を共有                                      |
|       | 14:00 | 「高校での勉強」「大学での学問」「社会貢献」「未来・将来の自分」について気になっていることを書き出し、語り合う |
|       | 15:05 | 語りたいテーマを選んでディスカッション                                     |
|       | 16:30 | オックスフォード大・荻谷剛彦教授講義「学問と社会のつながり」                          |
|       | 18:00 | 大学生・社会人とのセッション「学問・勉強と今」                                 |
| 20:00 |       | 1日目終了/宿舎へ移動   |
| 2日目   | 9:30  | 実現したい社会と、そのための貢献についてディスカッション                            |
|       | 10:45 | 大学の学問と、高校の勉強の意味・価値についてディスカッション                          |
|       | 13:00 | 学びの目的をシートに記入、共有   |
|       | 13:40 | 半年後の自分への手紙を書く   |
|       | 14:00 | ワークショップの感想、気づき、そして「自分にとっての学び」を1人一言ずつ発表                  |
| 15:00 |       | 全プログラム終了  |

# 学びの意欲を高める 新たなモデルを目指す

ベネッセ教育総合研究所が企画・運営する「高校生未来プロジェクト」は、高校生の社会貢献意識と「学び」をつなぐことで、高校生の学びの意欲を高めようとして始められた。ここでは、2012年のワークショップの概要と成果を振り返る。



に決めることで、勉強や進学に対する意欲を高める「自己実現モデル」の指導が難しくなっていることが課題として浮かび上がってきた。

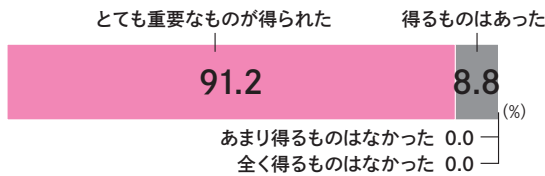
だが、その一方で、東日本大震災以降、高校生の「社会に貢献したい」という思いや、ボランティアに対する関心が高まっていることが調査によって確認された。そうした状況を踏まえて、ベネッセ教育総合研究所は、「高校・大学での『学び』が社会への貢献に役立つことを実感できれば、高校生の学びの意欲は高まるのではないか」という仮説の下、高校生自身が「学び」の意味や社会と「学び」のつながりを全国の高校生活と共に主体的に議論する場として、「ポスト3・11 高校生未来プロジェクト（以下、未来PJ）」を企画した。

## 全国の高校生が 自分、社会、未来を語り合う

オックスフォード大の荻谷剛彦教授の企画協力の下、未来PJは企画された。全国から1000人を超える

### 実施直後 図1 2日間のワークショップで、大半の参加者が学びへの思いを捉え直した

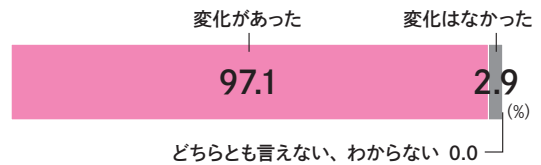
Q. 2日間のワークショップを通して、何か得られるものはありましたか？



◎どのようなことを得たか、具体的に教えてください

夢・目標・やりたいことの変化・確信/学ぶことの意味・重要性/自己の再認識/知識の浅さ/議論・対話の大切さ/いろいろな意見・価値観をシェアすることの大切さ/新しい友人・仲間 など

Q. 2日間のワークショップを通して、学びに対する思いや、大学で学びたいことに変化はありましたか？



◎どのような変化が具体的に教えてください

学ぶ意味を見いだせた/前向きになった・自分で考えて行動できるようになった/みんなから刺激を受け、中途半端ではいけないと思った/知識がないことは恥ずかしいと思った/常識を突き詰めることが大切だと思った など

### 実施直後 図2 ワークショップを経て変化した、高校生たちの「学び」への思い

高校での学びに対してポジティブな感情を持てるようになった！

1年生男子 Aさん

学校で教えられることはその大半が実用性に欠けるものであるのかもしれませんが、そうした無意味に思えるものほど、私たちの思考力を高めるのだと、私は思います。

さまざまな分野を学ぶことにより、多面的なものの見方・考え方が養われるのではないのでしょうか。ただ、「多くを学ぶ」ということは、勉強が不足していれば単なる「知識の詰め込み」で終わってしまうということです。そうならないよう、地道に勉強し続けようと思います。

勉強がつまらないのではなく、勉強をつまらないと思っている自分が一番つらい！

「学ぶ」ということは、問題解決に必要な共通認識を得るための「作法」であって、そうした型を身に付けることで学問の道は開かれる。

明日は、今日気付いたことを深め、より自分の心に定着させられるようにしたい。そして、より多くの人と話をし、今回のワークショップを今後に生かしていきたい。

高校での勉強は「さまざまな問題を解決するために必要な抽象的思考を培うための準備」に過ぎない。これまでは高校での学びに対して、全くポジティブな感情を抱いていませんでしたが、今回の2日間のワークショップを通じて、かえってポジティブな感情だけを抱くようになりました。大学で学びたいことに変化はありませんでしたが、学ぶ際には常に問題意識を持つように心掛けたい。

参加前

ワークショップ  
1日目



ワークショップ  
2日目



「高校の勉強はセンター試験のため」→「たくさんの可能性を導き出すため」

2年生女子 Bさん

高校で学ぶことのほとんどが将来の生活では直接必要のないことばかり。それでも勉強をする理由はただ1つで「センター試験で必要だから」。しかしそれで終わるのではなく、センター試験は将来につながっていく。結局は将来のために勉強をするのです。将来のためだけではアバウトすぎるので、私はセンター試験で良い点を取ることが今高校で学ぶ意味だと思っています。

こんなにもみんなの価値観が違うなんて思わなかった！ 想像以上にみんなの答えがしっかりしていて驚いた。

ずーっと頭を使っていたので、とても疲れて、頭がいろいろな意味でモヤモヤしています。もっと深くみんなと話したい。みんな初対面で、お互いを尊重しすぎているのではないかと思ったので、もっと意見をぶつけ合っていけたら楽しいはず！

自分の考えばかりを主張するのではなく、人の考え方も耳を傾けて、自分の中でも気付ける・考え直せるようになりました。

みんな真っ直ぐに未来のことを考えている。自分も中途半端ではいけない！

自分の望む夢にもたくさんの方法や道がある。明日からは、もっとたくさんの人と出会って、もっと視野を広げていきたい。たくさんの可能性を導き出していきたい！

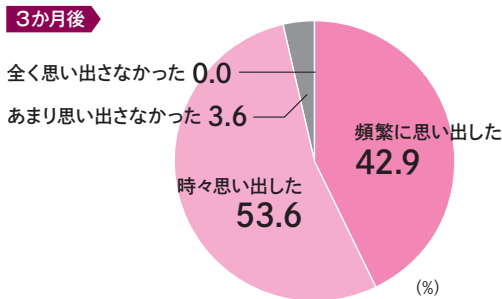
応募があり、厳正な審査の結果、34人（男子13人、女子21人）の生徒の参加が決定した。そして、2012年12月、東京大学本郷キャンパスの福武ラーニングスタジオにて、1泊2日のワークショップが開催された。

ワークショップ1日目は、「高校での勉強」「大学での学問」「社会貢献」「未来・将来の自分」について、グループで語り合い、更に「学問と社会のつながり」をテーマにした荻谷教授による講義、「学問・勉強と今」をテーマにした大学生・社会人とのセッションを経て、学びの価値について考えていった。

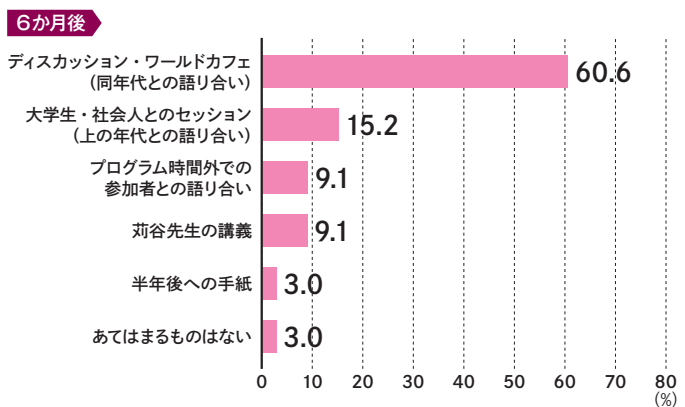
そして2日目は、「どのような社会を実現したいか」「その実現に向けてどのような貢献の仕方が考えられるか」「大学での『学問』、高校での『勉強』の意味・価値」についてグループで議論し、自分にとっての学びの意味を考えていった。最後に、2日間の総まとめとして、「半年後の自分」に向けて手紙を書き（2013年6月に各自の手元に到着）、ワークショップが終了した。

### 3・6か月後 図3 影響を与えているのは、プログラム内外での「語り合い」

Q. ワークショップが終わってから現在までの間、あなたはワークショップのことを思い出すことがどの程度ありましたか？



Q. 「今の学び」に影響を与えているプログラムは何ですか？



◎どのようなことを思い出したか、具体的に教えてください

- ・3学期が始まってすぐに、友達が「勉強とか学校とかだるいわ。冬休みに戻りたい～」みたいなことを言っていた時、みんなとのディスカッションでの『今』のことは未来に繋がっているからやるんだ」という話が思い浮かんだ。そのおかげで、学年末まで気を引き締め頑張ることが出来た。
- ・まず、ほとんどは参加者のことだった。メールなどをして、その度にその人たちの顔や言われたことを思い出した。あと、勉強が行き詰まった時に、時々荻谷先生のお話を思い出すことなどもあった。他の参加者の目標などを思い浮かべ、自分も頑張るようにした。
- ・大学に進学するかどうか考えた時に、みんなと「学び」について話したことを思い出した。

### 6か月後 図4 ワークショップで得られたことは、生活、学習、進路に好影響を与え続けている

Q. あなたがワークショップから得たことは、ワークショップ後から現在までのあなたの普段の生活や学習・進路に対してどんな影響を与えたと思いますか。

#### 夢・やりたいこと

- ・やりたいこと、夢を探すようになった。
- ・やりたいことを積極的に探そうという姿勢で生活していたため、やりたいことが増えてより勉強に取り組む意欲が増えました。

#### 勉強・学習に対する考え方

- ・どの分野の知識も決して無駄ではないと改めて実感しています。
- ・受験に必要な教科に対しても、真面目に取り組むようになり、どんなことも、いつか自分のためになると思うようになった。

#### 学校の勉強以外の行動

- ・勉強だけでなく、社会貢献について考え、身近なボランティア活動に取り組むようになった。
- ・短期留学にチャレンジしてみた。

#### 進路意識・将来展望

- ・大学に行くという進路の考え方を与えてくれた。

#### 人との関係

- ・「こんな考え方もあるのか」「これは一理ある」という他人の意見の大切さがとてもよく理解できた。
- ・ディスカッションや普段の会話の中で、相手と自分の関係を意識して話すようになった。

#### 自己意識

- ・今まで、自分が行くことに対していつも「正しいのか」「誰かのためになっているのか」「これでは駄目」と追い込み焦っていましたが、自分の出来ること（自分しか出来ないこと）をすることが社会貢献につながることを理解して、考え方や行動に余裕が生まれ始めました。

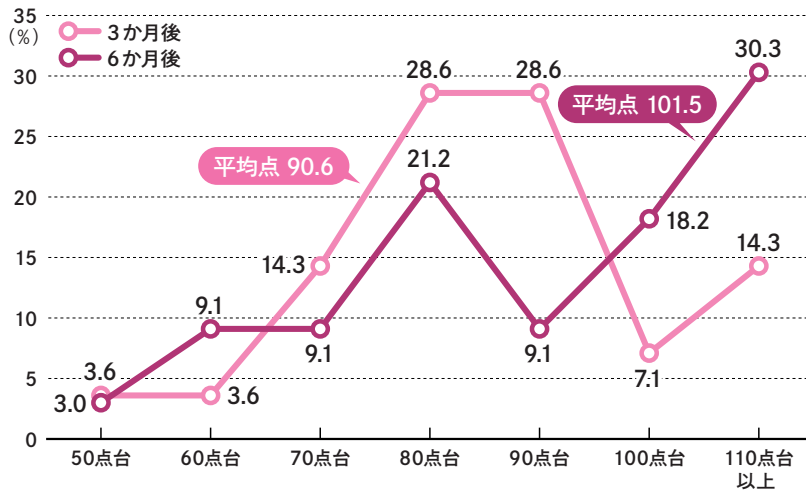
## 6か月後も学びの意欲は維持・向上した

2日間のワークショップで、ほとんどの参加者が高校での学びに対してポジティブな感情を持つようになった（P.7 図1・2参照）。更に、ワークショップから約3か月後と約6か月後に、生徒の学びの意欲を検証したところ、ワークショップの経験は、普段の生活や学習、進路に対して良い影響を与えていることが分かった（図3・4参照）。そして、学びに対する意欲はワークショップ後も維持・向上しており、特に6か月後は、参加者の半数近くが終了直後よりも意欲が向上していることが明らかになった（図5参照）。

これらのことから、「学ぶ意味」「勉強する目的」をテーマに、高校生同士や高校生と大学生・社会人で語り合い、内省を経て気付きへと至る手法は、学びの意欲の変容に効果を発揮する可能性があるという結論が得られた。

3・6か月後 図5 6か月後、参加者の半数近くの学びへの意欲が終了直後よりも向上

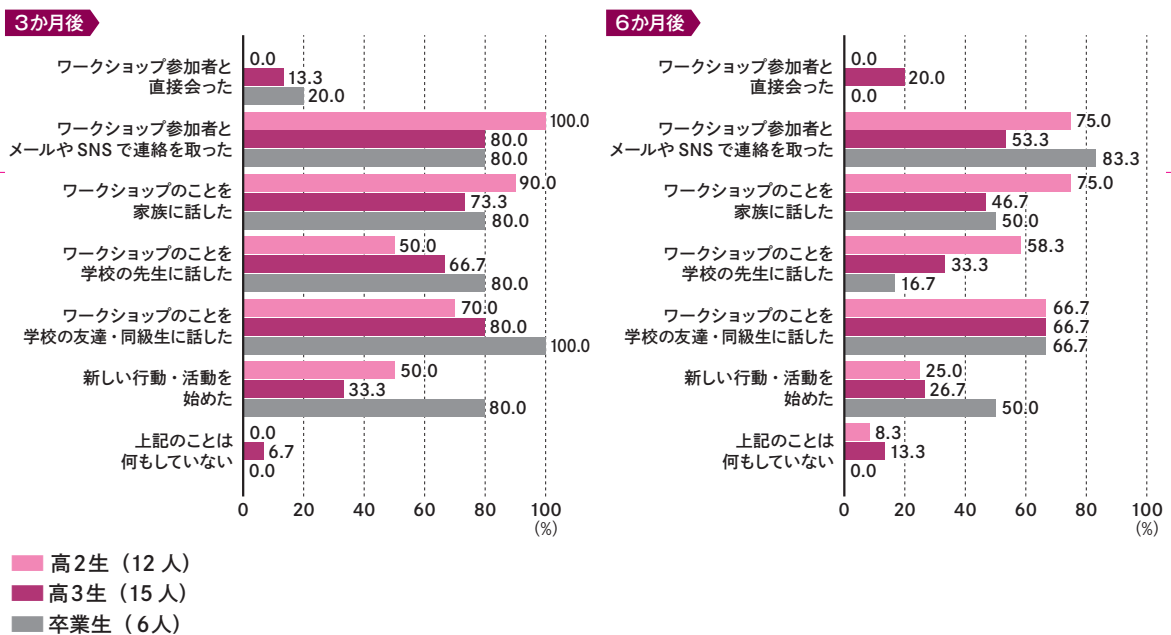
Q. ワークショップ直後のあなたの学びに対する意欲を「100点」とすると、現在のあなたの学びに対する意欲は何点くらいになりますか？ 大体で構いませんので数字でお答えください



	3か月後	6か月後
300点		1
170点	1	
150点	1	2
126点	1	
120点	1	6
110点		1
105点		1
100点	2	5
98点	1	1
95点		2
90点	7	
85点	1	1
83点	1	
80点	6	6
75点	1	2
70点	3	1
67点		1
60点	1	2
55点		1
50点	1	

3・6か月後 図6 参加者の約67%が6か月後もワークショップのことを友達や同級生に話した

Q. ワークショップから3か月後までの期間で／3か月後から6か月後までの期間で、あなたは次のようなことをしましたか（複数回答）



## 学校実施型への 挑戦

学校という日常の中、  
生徒の対話は深まるのか？

「ポスト3・11 高校生未来プロジェクト」(以下、未来PJ)のワークショップ終了から3か月、6か月が経過しても、参加した高校生たちの学ぶ意欲が維持・向上していたことは、学びの意味や目的を高校生同士が語り合うことの意義を十分に実感させるものであった。

だが、2012年度までの未来PJは、全国から集まった高校生によってつくられた非日常の空間で

# 同じ高校の生徒同士が 学びについて語り合う 新しい「未来PJ」が始まる

2012年度までの「高校生未来プロジェクト」の結果を受け、13年度は初めて学校でワークショップが実施された。同じ空間で高校生活を送る者同士が、学びの意味や目的について真面目に語り合うことは出来るのか、そして、学びの意欲は高まるのか。実施内容や条件を変えながら、4つの高校で検証が行われた。

あった。参加した高校生たちが「学びの意味や目的を学校の中で語り合うことがない」「初対面の相手だから、どう思われるかを気にせずに自分の意見を言えた」と振り返り、真面目なことを語り合う場を学校の中につくることが出来るかどうか、次の課題として浮かび上がってきた。一方で、2012年度の未来PJの取り組みとその成果を紹介した本誌2013年6月号を読んだ全国の高校教師からは、「自分の学校でこうした取り組みに挑戦してみたい」という申し出が寄せられるようになっていた。

そこで、ベネッセ教育総合研究所では、過去の未来PJで行ったような高校生同士の対話の場を、実際の学校現場につくったとしても、学びの意欲を向上させる効果が得られるのかを検証するために、13年度は4校の高校でワークショップを実施することにした。

### 異なる条件のもと全国4校で ワークショップを実施

4校で実施された未来PJは、同じ高校に通う生徒が集まって行うという点では同じだが、ワークショップ



初芝富田林高校では、2日間連続で各回6時間、合計12時間のワークショップが行われた。

プを行う日数、生徒の募集方法などは異なっている(下図参照)。特に、今回初めて「全員参加」という形態を採った学校もあったため、ワークショップそのものへの参加意欲が、得られる成果にどのような影響を及ぼすのかも大きな関心事となった。

ワークショップの内容の細部は学校によって異なるが、まずは生徒同士で語り合ったり、先輩の大学生や社会人の話を聞いたりすることで学びの意味や目的を拡散的に考え、その後一人ひとり考えたことを収束的に深めて、それぞれの言葉にしているという大きな流れは共通している(P.12・13参照)。

2012年度のワークショップと比較すると、ワークショップ中に私語をしたりふざけたりと、ワークショップに集中できない生徒が散見された学校もあった。しかし、そのような生徒も、ファシリテーターの指示で語り合いを行うグループを変えたり、大学生や社会人が語り合いに参加したりすることで、適度な緊張感を持って語り合いに参加できる

### 「高校生未来プロジェクト」学校実施型・全体概要

#### 埼玉県立大宮光陵高校

◎1986(昭和61)年開校。普通科(普通科内に外国語コースを設置)、音楽科、美術科、書道科の4学科1コース/全日制/共学/1学年普通科240人(うち40人は外国語コース)、芸術系学科120人/14年度入試では、国公立大は、筑波大、東京学芸大、東京芸術大、東京工業大などに15人が合格。私立大は、東京音楽大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ331人が合格(現浪計)。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2013年11月9日(土)、12月21日(土)、 2014年1月18日(土)、3月15日(土)の 全4回。各回4時間	通学型	高校1・2・3年生、 男女約30人	任意参加	教員向け体験研修を 2時間実施

#### 東京都・私立<sup>しらうめ</sup>白梅学園高校

◎1964(昭和39)年開校。建学の理想として「ヒューマンイズムの精神」を掲げ、生徒一人ひとりの人格を尊重した教育を行っている/全日制/女子/普通科(特別選抜コース、選抜コース、進学コース)/1学年250人/14年度入試では、国公立大は、東京外国語大、東京学芸大、一橋大などに6人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、津田塾大、早稲田大などに延べ161人が合格(現役のみ)。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2013年10月23日(水)、10月30日(水)、 11月6日(水)、11月20日(水)、12月9日(月) の全5回。各回2時間(最終回のみ4時間)	通学型	高校1年生、1クラス、 女子39人	全員参加	ホームルーム及び総合的な学習の時間で 実施

#### 大阪府・私立<sup>とんだばやし</sup>初芝富田林高校

◎1984(昭和59)年開校。85(昭和60)年に初芝富田林中学校を併設/全日制/共学/普通科/1学年337人/14年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、京都大、大阪大、九州大などに110人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、関西大、関西学院大、同志社大、立命館大などに延べ551人が合格(現浪計)。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2014年3月13日(木)、14日(金)の全2回。 各回6時間	通学型	高校1年生、男女54人	任意参加	教員向け体験研修を 2時間実施

#### 山口県・私立慶進中学・高校

◎1928(昭和3)年創立。2002(平成14)年、慶進高校に改称。2004(平成16)年から慶進中学校を併設/全日制/共学/普通科(中高一貫コース、アドバンスコース、グローバルコース)/1学年258人/14年度入試では、国公立大は、東京大、大阪大、広島大、山口大、九州大などに70人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、福岡大などに延べ308人が合格(現浪計)。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2014年3月27日(木)、28日(金)の全2回。 各回6時間	合宿型	高校1年生、中高一貫 2クラス、男女63人	全員参加	教員向け体験研修を 2時間実施

ようになっていった。このように、学校の状況によっては「生徒を飽きさせない工夫」がより必要な場合もあることが確認された。また、一定の期間を設けて複数日程で行う場合、前回までの気付きを生徒自身が忘れてしまわないような仕組みづくりも必要であることが分かった。

### 校内での対話を通して 生徒の学びの意欲は高まる

ワークショップに参加した生徒に、事後アンケートで「ワークショップ受講前の勉強のやる気を100とした場合、受講直後のやる気はどれくらいか」と尋ねたところ、平均で216という高い数値結果が得られた。また、生徒からは次のような感想の声が寄せられた。

「自分と違う意見や考えを聞くことで、ものを考える視野が広がった」  
「有言実行するべく、これからしっかり勉強していこうと思った」

「考え方が大人になった。難しいことにも興味を持つようになった」  
「人の意見を聞くことによって、考え方や視野が広がり、自分が変わ

## 「高校生未来プロジェクト」学校実施型ワークショップの流れ（例）

### 3 先輩とのセッション

#### 身近な大学生、社会人との対話を通して自分を見つめる

大学生や社会人の先輩が、高校時代の悩みや、高校時代の学びと今の自分のつながりを語る「ジブンガタリ」を聞いて、視野を広げていく。先輩の話を受けて生徒は感想シートを書き、その後、グループ内で感想を共有する。

#### ◎先輩の「ジブンガタリ」のテーマ例

- 高校時代の自分、悩んでいたこと、乗り越えたこと
- 大学で真剣に取り組んでいること
- 社会に出て（大学を出て）したいこと、どんな仕事がしたいか
- 高校での勉強の意味や目的について、当時どう思っていたか。今思えば、もっと何をしておけばよかったか



大学生や社会人が自分自身の高校生活を振り返りながら、学びの意味や目的、更に社会の課題について後輩たちと語り合った。（写真上は初芝富田林高校、写真下は慶進中学・高校）

### 1 ジブンガタリ（\*）

#### 普段は話さない「自分のこと」を話す

4人程度のグループになって、以下のような項目について、1人5分ずつ話をする。思ったことを素直に語り、それに対して周りの生徒は相手のために聴いてあげることで、「みんなで安心して話せる雰囲気」をつくっていく。

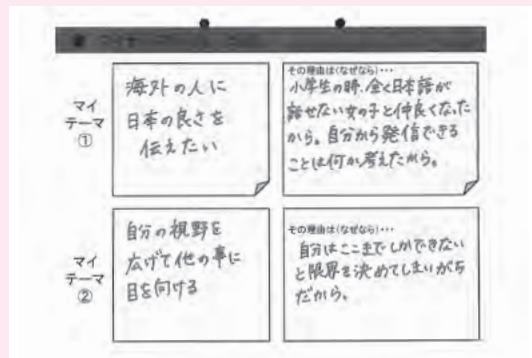
#### ◎「ジブンガタリ」のテーマ例

- 小さい頃、自分はどんな子どもだったか
- 今頑張っていること
- なぜ、何のために勉強すると思うか
- 勉強についてモヤモヤしていること
- これまでの挫折やうれしかったこと
- 将来、何をしたいか、どうなりたいか
- 大学は何のために行くのか

### 2 マイテーマを考える

#### 自分なりの問題意識を設定してみる

「ジブンガタリ」を踏まえて、自分なりに見いだした中長期的な展望となる「マイテーマ」を考える。ただし、1つに絞り込む必要はなく、また、あいまいな言葉、漠然とした表現でもよい。前に進むための指針として、ひとまず仮決める。



\* 「ジブンガタリ」は、株式会社スコラ・コンサルトの登録商標です。

ることが分かった。そして、夢を人に伝えたことよって、もっと頑張らないといけないと思った」

**学びの意味や目的は、なぜ外向きになるのか？**

全国から参加者を募った2012年度のワークショップでは、社会が抱える課題に対して高い意識を持ち、早い段階で学びの意味を社会貢献と結び付けて語る高校生は少なくなかった。今回の学校実施型では、社会貢献について語る生徒は決して多くはなく、むしろ「勉強は進学のために必要」「高校生なのだから勉強して当然」などと語る生徒が大半であった。だが、それでもワークショップ終了後には、学びの意味や目的を、他者との関係構築や社会の発展と結び付けて語るようになっていた生徒が少なからずいた。

そうした生徒の内面的変化はなぜ起きたのか。次ページからの参加生徒のインタビューと、協力校の教師たちによる座談会を通して考える。

## 5 400字小論文

### グループで読み合っ 感想を共有する

一人ひとりの考えを更に深める場として、「学ぶってどういうこと？」をテーマに400字小論文に取り組む。文章構成の大まかな流れは例示されるが、感じたことや気付いたことを自由に書く。書き終わったら、グループ内で読み合い、感想や気付きを共有する。



## 6 半年後の自分への手紙

### 未来の自分と対話する

ワークショップで学んだこと、これから行動していきたいこと、頑張ったであろう半年後の自分へのメッセージなどを書く。ワークショップでの気付きや感動を半年後に思い出すための仕掛けとなる。

#### ◎自分への手紙の内容例

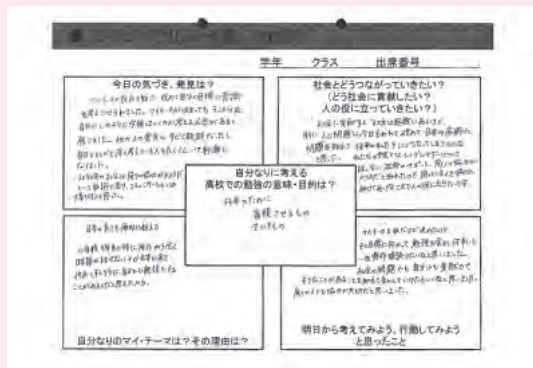
- このワークショップで学んだこと
- どう社会と関わっていきたいか
- 今のマイテーマ（興味・関心、問題・目的意識など）
- 自分なりの学ぶことの意味や目的
- これからどう勉強していくか
- いつまでに、何をしていくか（目標設定）
- 目標が達成できた時の自分のイメージ
- 半年後の自分への<sup>ねが</sup>いの言葉

※半年後、目標の状態になれていなかった場合に自分に掛けてあげた言葉を入れてもよい

## 4 ジブンヅクリ

### 自分の考えを深め、 他者と共有する

ここまで接してきた様々な意見を踏まえて、自分の中に生まれた考えを深め、具体的な言葉にしていく。ここから生徒の思考は収束に向かう。「自分なりに考える高校での学びの目的」をグループの中で共有する。



### 初日の学び、気づきを10個を書こう(5分)

1. 新発見と気づき
2. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
3. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
4. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
5. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
6. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
7. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
8. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
9. 学びがもたらした学びの経験と学びの気づき
- 10.



学びの意味、目的を言葉にしている。(写真は、初芝富田林高校)

# 学校の仲間と学びの意義を語り合う 「高校生未来プロジェクト」で 学びの意欲はどう変化したか

4校で実施された「高校生未来プロジェクト」のワークショップでは、生徒の学びの意欲にどのような変化が現れたのか。2校の生徒に聞いた。

## ケース1

### 埼玉県立大宮光陵高校



「自分の意見に反論されたことは、新鮮で面白い体験でした」

新間貴彬さん

「知識の大切さに気が付き、人と話すことが楽になりました」

河野帆夏さん

## ワークショップに参加した理由

河野 先生から「ワークショップは、自分のことや社会のことについて、

いろいろな人に伝えたり、相手から聞き出したりする力を鍛えることの出来るチャンスだ。大学でも社会でもそうした力が必要だから、参加した方が良い」と勧められました。

ただ、私は人と話すのが得意ではなかったのですが、自分のことをちゃんと伝えられるかどうか心配でした。

新間 ワークショップでは、社会人や先生、友達といろいろなテーマで語り合うと聞いて興味を持ちました。いろいろな人と話す中で、高校生活で大切にすべきものが見つかるかも……といった期待もありましたし、日本の現状やこれからについてみんなで考えてみたいという気持ちもありました。

河野 実際のワークショップは、イメージしていたものとは違いました。私が想像していたのは、「上手



埼玉県立大宮光陵高校 2年生  
新間貴彬  
普通科外国語コースに在籍。将来の夢は、英語を使う職業に就くこと。好きな教科は英語。



埼玉県立大宮光陵高校 2年生  
河野帆夏  
普通科外国語コースに在籍。旅行業など知識を生かしたサービス業に関心がある。好きな教科は国語。

に話せるコツ」を教えてください、プレゼンテーションの練習をしたりするものでした。ところが、ワークショップでは、緩やかにテーマは決められているものの、自由に周りの人と話すだけで、上手に話すための



大宮光陵高校では、全学年から参加希望者が募られ、約30人が参加。全4回（各回4時間）で実施した。

コツなど誰も教えてくれませんでした。それでも、ワークショップの後には達成感を持つことが出来たので、続けて参加することになりました。

### ワークショップで 印象に残っているもの

**新聞** 3回目のワークショップで、先生を交えた4人グループで「英語学習」について話していた時のことです。「日本人も小さい頃から英語を習うべきだ」と僕が言ったら、先

生に反論されたのです。ちょっとびっくりはしましたが、僕がさらに反論すると、先生は「なるほど。そういう考えもあるね」と納得してくれました。この時が印象に残っているのは、反論されたことで、「そんな考え方をしているのか」という新鮮な驚きと議論することの面白さの実感があったからだと思います。

**河野** 友達と社会問題について話し合うのは初めての体験でしたが、いろいろな考えがあることを実感できて楽しかったです。また、「学ぶとは、どういうことか」というテーマの小論文を書いたのですが、私は「学ぶとは、理解すること」と書きました。グループのメンバーで小論文の回し読みをした時に、「確かにそうだね」とみんなに言ってもらえたのがうれしかったです。ワークショップに参加する前なら、「学ぶとは、学校で勉強すること」としか答えられなかったと思います。当たり前のことを深く考えることは、普段の生活の中ではあまりないことですし、別

深く考えなくても特に困ることはなかったけれど、みんなで話し合ってみたら意外と楽しいことに気が付きました。

### ワークショップを経て 何が変わったか

**河野** 今まで家でポーツとしていた時間にニュースを見るようになりました。社会問題についてみんなよく知っていましたし、知らないと恥ずかしいと思うようになったからです。そして、人と言葉のキャッチボールが出来るようになった気がします。私は、授業で先生の質問などに答える時にもドキドキしてしまうほどの上がり症でしたが、ニュースを見たり、少しでも関心を持ったことについて調べたりすることで知識が増え、話すことが楽になったように思います。

**新聞** 僕もニュースをよく見るようになりました。そして、ニュースを見ていて分からなかったことは、その都度親に聞いています。以前は、学校から帰宅した後、英語の勉強を

兼ねて洋画を字幕で見っていました。今は帰宅後はまずニュースを見るようになりました。洋画を見るのはやめてしまったのではなく、夜、寝る直前の時間に見るようにしています。英語は毎日欠かさず聞いておきたいからです。

### 学校の勉強に対する意欲は 変化したか

**河野** やる気が高まったと思います。授業中、先生の話の中に知らないことがあれば、自分で調べるようになりましたし、テストに出ないようなところも大事だと思ったりノートにメモするようになりました。いろいろな知識を吸収したいと思うようになったからだと思います。

**新聞** 僕もやる気が高まったと思います。ワークショップで「2020年の東京オリンピックに向けて、日本をどんな国にしたいか」をみんなと話し合ううちに、僕も社会の一員として頑張ろうという気持ちが強くなってきました。

**河野** 一番の気付きは、知識が大切

だということ。今までそのことに気が付かなかったのは、授業では教科書の内容さえ理解しておけばなんとかなりまし、教科書に書いていないことについて深く考える場面もなかったからです。だから、授業だけを受けていても知識の大切さを

実感できなかったでしょうし、自分が人とうまく話せないのは知識がないからだと気付くこともなかったかもしれません。でも、ワークショップで知識の大切さに気付いてからは、授業中の先生のちょっとした言葉もメモするようになりました。

## ケース2

### 山口県・私立慶進中学・高校



「ワークショップの後、自然に机に向かう自分に驚きました」  
矢儀文博さん



「みんなと話し合えたことそれ自体が、自分の自信になっています」  
秋月真由子さん

### ワークショップの雰囲気

**矢儀** 今回のワークショップには、中高一貫コースの4年生(高校1年生)に該当全員が参加しました。1泊2日の日程で、消費税増税などの社会的なテーマについてグループで話し合ったり、大学生の先輩と話をしたりしました。先輩の話はとて

考になりましたし、同じ高校生でもいろいろな意見があるのだと分かったことが新鮮でした。宿泊先のホテルでは、夜中まで友達と議論をしました。「おまえ、そんなこと考えていたのかよ!」といった驚きの連続で、視野が広がった気がします。普段ニュースを見ていて、いろいろなことを学校ですぐに口に出せるわけではあ

### ワークショップで気付いた学びの意味

りません。今回、話し合いの場をつくってもらったことで、そのようなことを話しやすくなったと思います。  
**秋月** 社会問題について話し合った時、グループの中で激論になることもあり、これまでにはない体験でした。やはり、課題を与えられ、「みんなで話し合ってください」と言われたから、話し合いやすかった気がします。そういった意味では、大人につくってもらった特殊な環境ではありましたが、話し合ってみると意外に楽しかったです。そして、友達と討論する中で、学びは大人になるために必要な知識を得るものだと思うようになりました。

**秋月** 知識を得るだけではなく、それを社会で役立てられるようになることが大事だと思うようになりました。それまで私は、「高校生なのだから勉強するのが当たり前」としか考えたことはありませんでした。高校の勉強は大学入試のためのもの、大学に入ってから勉強が社会に出るためのものと思っていました



山口県私立慶進中学・高校5年生  
中高一貫コースに在籍。ボランティア部に所属。国立大の薬学部を志望している。



山口県私立慶進中学・高校5年生  
中高一貫コースに在籍。生徒会活動に参加。経済学系統に進学し、情報経済学などを学ぶのが目標。

### 秋月真由子

あきつきまゆこ

から。

**矢儀** 毎日授業を受けて、家に帰ってまた勉強して、それがずっとぐるぐる続いていくのが当たり前だと思っていました。目標や目的があってもなくても、大学に行くのは決まっているから勉強しなければいけないと……。だから、正直、勉強は嫌々やらされていたものでした。もちろん、やる気が起きない時もあり、そんな時はどうしたらよいか今までは分かりませんでした。でも、ワークショップに参加して、「学んだことを生かして、社会にどのような影響を与えるのかを考えることが大切なのだ」と思うようになり、学びの目的が少し見えてきたように感じています。

**秋月** 以前は、勉強していてもテレ



慶進中学・高校では、中高一貫コース5年生の生徒全員（63人）が参加。1泊2日の合宿形式で実施した。

ビに逃げたり、もういいやと寝てしまったりすることもありました。でも、勉強の意味を考えるようになって、そうしたことが少なくなりしました。今でも「大学合格」は私にとって大切な目標ですが、大学合格がゴールではなく、大学の先のことまで考えるようになりました。そして、学びとは、学校で勉強することだと思っていました。ただ、それだけでなく、いろいろな人の話を聞くことも学びなのだと思ってきました。きっと部活

動などにも学びはあるのだと思います。

### ワークシヨップが 終わってからの変化

**矢儀** 2日間のワークシヨップの後、家に帰ると、疲れているのにもかかわらず自然に体が机に向かったのです。自分でも「なんで？」と思いました。宿題もあったのですが、嫌々というわけでもなく、すっと机に座った自分に驚きました。ワークシヨップのおかげなのかなあと思いました。

**秋月** 学校で勉強している時、ワークシヨップのことを思い出して、勉強を頑張ろうと思うことがよくあります。また、将来のため、自分のためという気持ちが強くなって、家庭学習が習慣化してきました。

**矢儀** 勉強を、「目標にたどり着くために必要な手段」だと確認できたような気がします。また、時間の使い方や先輩に具体的に教えてもらったのも良かったです。同じ学校から憧れの大学に進学した先輩の話など

で、説得力がありました。勉強に対する抵抗がなくなったおかげで、課外活動など、勉強以外のことも頑張ろうという気持ちになっています。

**秋月** ワークシヨップに参加した同級生を見て感じるのには、勉強のメリハリというか、はじめがつくようになった人が多いということです。それは、5年生（高校2年生に該当）に進級したから当たり前なのかもしれませんが、自分で自分をコントロール出来るようになった人が増えたような気がします。そのような人を見ると、私も頑張らないといけないなあと思います。

### 今後もクラスで 自由に語り合えるか

**秋月** ワークシヨップに比べると、いつものクラスの中では真面目な話はやはり少ししにくいです。自分が話した時に相手が話してくれるかどうか心配からです。ただ、今回のワークシヨップでは、みんなが「やろう」という雰囲気になりました。きっとみんな一度経験したことで、

自分たちにも真面目な議論が出来るんだと自信を持ったと思います。

**矢儀** 僕は、友達と議論している時、自分が意外と話せることに気が付いて「俺って結構できるんだなあ」と少し自分に自信を持ちました。クラスのみならず「またやろう！」と声を掛けたら、きっと本気で語り合えると思います。

ワークシヨップの形式・形態にかかわらず、高校生が学びの意味や目的について、学校の仲間と語り合うことは、学びの意欲の向上に一定の効果をもたらすことが分かった。そこで、次ページから、大宮光陵高校、慶進中学・高校を始め、「高校生未来プロジェクト」のワークシヨップを校内で実施した4校の高校教師が、学びの意味や目的を語り合う場の重要性と、学校での指導の可能性について語り合う。

# 自分を語る場を学校につくり 生徒の学びの意欲を高める

2013年度、「高校生未来プロジェクト」のワークショップを校内で実施した4校の教師が集まり、参加した生徒の変化の様子や、生徒の学びの意欲を高めた要因、そして今回の取り組みをどう今後の指導に生かしていくのかについて、熱く語り合った。

## 学びの意味を考え、 発信する場をつくりたかった

——高校生未来プロジェクト(以下、**未来PJ**)を自校で実施した理由をお聞かせください。

**西山** 本校は、中高一貫コースの生徒を対象に実施しました。生徒たちは、進学意識は高いのですが、「何のために大学に行くのか」が明確になっていない生徒も少なからずおり、学習態度にいま一つ貪欲どん欲さが感じられませんでした。未来PJで大進学学の目的や意味を発見し、学びが主体的になればと考えました。

**中村** 本校は女子校であり、「女性

として社会の中でどう生きるか」といったことを考えるための講演会などは充実しています。しかし、ここで語られる内容は、生徒にとってはどうしても「少し先の話」であり、学習意欲や進学意識の向上には結び付きにくい部分がありました。学びの意味を生徒主体のワークショップの中で考えることで、今の自分に満足せず、高校の学習に意欲的に取り組むようになってもらいたいと思い、実施しました。

**前中** 1年生の夏休み明け、とても疲れている生徒たちの様子を見て、勉強していることが将来にどう結び付くのがイメージ出来ないまま、量をこなしていることに苦しんでいる

埼玉県立大宮光陵高校校長

### 久保島昌一 くぼしま・しょういち

教職歴36年。同校に赴任して2年目。「未来PJを実施して一番良かったことは、生徒のリアルを見られたことです。生徒の実態を丹念に追い掛け、その上で指導を組み立てることの大切さを再確認しました」



るのではないかと感じました。そこで、学びの大切さを知ってもらい、生徒を元氣付けようと、学年団の教師が高校・大学生活を語る学年通信

東京都・私立白梅学園高校

### 中村雅一 なかむら・まさかず

教職歴25年。同校に赴任して23年目。担当教科は英語。「未来PJの成果についてこうして先生方と話し合ったことで、『私ももっと頑張らなければ』と刺激を受けました。対話は、教師の向上心も高めるものです」



を配布したり、高校の勉強の意味を大学生に話してもらおう交流会を実施したりしましたが、他人から聞けばかりではなく、自分で考え、気付け

たことを発信する場も必要だと思  
い、未来PJの実施を決めました。

**久保島** 私は、以前からインプ  
ット中心の授業に限界を感じていま  
した。授業中、生徒は正解を答えさ  
せられることはあっても、自分の考  
えを述べる機会はほとんどありませ  
ん。本校にも、勉強に真面目に取り  
組み、量もこなしているのに思う  
ように成績が伸びない生徒がいます  
が、もしかすると、学んだことを基  
にして自分の考えをアウトプットす  
るに至っていないからではないかと



大阪府・私立初芝富田林高校  
**前中マリヤ** まえなか・まりや

就職歴18年。同校に赴任して14年目。担当教科は国  
語。「未来PJで、生徒の中に大きな可能性があるこ  
とを再認識できました。校務に追われがちな教師のモ  
チベーションの向上にもつながったと思います」

いう思いが強くなりました。

### 安心して自分を語る場を 意図的につくる必要がある

——未来PJのワークショップの中  
で、印象に残っている場面を教えて  
ください。

**西山** ワークショップが始まって最  
初のうちは、自分の考えを話すのが  
恥ずかしくて、対話に集中できない  
生徒も少なくありませんでした。そ  
うした生徒に変化が見られ始めたの



山口県・私立慶進中学・高校  
**西山智彦** にしやま・ともひろ

就職歴6年。同校に赴任して7年目。担当教科は国語  
「今回のワークショップに参加したことで、生徒同士の  
対話を授業やHRに意識的に盛り込むようになった教  
師もいます。良い影響が確実に校内に広まっています」

は、現代社会の課題とその解決策に  
ついて、大学生の先輩と話し合うプ  
ログラムの時です。以前は、先輩と  
の交流といえば、受験勉強の体験談  
を聞くのがほとんどでした。ところ  
が、大学生にも正解が分からない  
テーマについて語り合うことで、生  
徒たちの対話へのめり込み具合が  
明らかに変わっていきました。

**中村** 生徒が社会問題についての自  
分の考えや、将来に対する期待と不  
安を赤裸々にみんなの前で述べる場  
面が印象的でした。その結果、クラ  
スの中に真面目な発言を抵抗感なく  
受け入れる土壌が出来たと思いま  
す。やはり、真面目な話が出来る場  
は、教師が意図してつくっていくこ  
とが大事だと思います。

——事後アンケートで、「真面目な  
話をしてよい場をつくってもらった  
から、安心して話せた」「周りの人  
たちが、うなずきながら聞いてくれ  
たので、話しやすかった」と振り返  
る生徒はとても多かったです。授業  
では、言語活動の充実などを背景  
に、生徒同士で意見を述べ合う機会

が増えていたのではないのですか。

**久保島** 生徒の多くは、授業で発言  
を求められた時、教師にだけ聞こえ  
るような小さな声で話しがちです。  
この時は、その生徒と教師だけのや  
りとりになり、周りの生徒の関心は  
そこに向きません。発言を求めた生  
徒に「きみの意見を、教室にいるみ  
んなが聞きたいんだ」ということを  
理解させる努力が教師に必要です。

**前中** 自分の意見が友達にどう受け  
止められるか、生徒はとても不安  
を持っています。国語の授業で、作  
品の感想を書かせることがあります  
が、それらをクラス全員に紹介しよ  
うとすると、「先生が読むのはいい  
けれど、みんなに読まれるつもりで  
は書いていない」と言われることは  
少なくありません。だから、今回の  
ワークショップで、自分の本音を友  
達にぶつけ、それが受け入れられた  
ことは新鮮な体験だったはずで  
**西山** そういう意味では、このワー  
クショップは生徒の内面に風穴を開  
ける作業だったと思います。実際、  
ワークショップから1か月後、「新



年度の目標をみんなの前で発表してほしい」と私が言ったところ、クラス全員が自ら進んで発表しました。恥ずかしいと尻込みする生徒がいなくなったのは、もうクラスで自分を隠す必要がないからなのでしょう。

**中村** 生徒は、人と違ったことを言ったり、失敗したりするのは恥ずかしいことだと思っています。でも、

自分のいる空間が居心地良くなってくると、素の自分を少しずつ出せるようになり、次第に失敗も恐れなくなるのでしょうか。

**前中** 事後アンケートの中に、「自分の話を他人に聞いてもらいたいと、自分がこんな欲しているとは思わなかった」という言葉がありました。生徒の内面には、自分を熱く語りたいという思いがあり、その思いがかなう場を教師がつくる必要があるのだと改めて実感しました。

**久保島** 自分のことを話すことへの抵抗感がなくなり、自分という主体が前に出た時、伝えるための言葉の大切さ、論理の重要性に気付くのでしょうか。そうして初めて生徒たちは、ずっと学びに向き合えるのだと思います。

**自分を十分に見つめることで初めて他者に目が向いていく**

—— 未来PJでは、学びの意味や目的を考えることがテーマでした。生徒は、それらをどのように見いだしていたのでしょうか。

**久保島** ワークショップ開始当初、

多くの生徒から出てきたのは、「学びは自分のため」「将来のため」といった言葉でした。それらは全て自分に引き寄せた言葉であり、学びの目的は実に利己的です。ただ、私はそれが悪いこととは思いませんでした。社会経験の乏しい生徒が、まず自分がしっかりしようと考えるのは当然のことだからです。しかし、ワークショップを続けるうちに、学びの目的を語る生徒の言葉は、「社会のため」「他者とつながるため」と外向きに変化していったのです。これは、安心して自分の意見をアウトプットし、他者と共有したから生まれた変化なのではないでしょうか。

**前中** 話を聞いてもらえたことが気持ちいいと生徒が感じたのは、自己肯定感が得られたからでしょう。だから、社会に貢献できる力が自分にもあるかもしれないと生徒が気付いたのだと思います。

**久保島** そう思います。逆に言えば、

生徒が自分のことを安心して語ることがないまま、「学んだことをどう社会で役立てたいか」と生徒にいきなり問い掛けても、生徒が学びの目的を社会と結び付けて考えることは難しいのではないのでしょうか。

**中村** 生徒は教師が期待している回答を予測して、もつともな言葉を返すかもしれませんが、それはきつと本心ではないのでしょうか。その時生徒は、こんなふうに話せば先生は納得するだろうと考えて、上手に話の落としどころを見つけているだけなのかもしれません。

**前中** 私はこれまで、学んだことを生かしてどのように社会貢献したいのかを、生徒に性急に問い掛けてしまっていたと思います。社会貢献に意識が向かない生徒を責めるような気持ちがあったのかもしれない。卒業生が大学入試を振り返る時、「大好きなおばあちゃんを喜ばせたいから頑張った」「見守ってくれた担任



「ワークショップは『これからは自分のことを語ってよいのだ』と生徒が気持ち切り替える作業だった」**西山**



「自分の考えを十分に表出できて、  
ようやく生徒の視線は  
他者へと向けられていく」  
久保島

の先生に良い報告をしたかった」など、身近な他者の存在を挙げるケースが少なくありません。これも実は、学びの目的が利己から利他へ、ゆつくりと広がっているのだと思います。「社会にどう貢献したいのか」をいきなり聞くのは、生徒の意識の広がりや深まりと逆行していたのかもしれない。

**西山** 「将来の日本の課題と解決策」を生徒が発表した時、はっとするアイデアも出ましたが、それ以上に本人たちの納得した言葉を聞けたことに私は感動しました。それまでのグループでの対話の中で、ここでは本気で話してよいということを実感できていたから、少し利他に目が向くようになったのかもしれない。  
**久保島** 「話せて良かった」という安心感、納得感を得た上で、「もっと伝えたい」という欲求が出た時

に、生徒の学びの意欲が向上するのだと思います。

**西山** 実際、ワークショップを経て、学習への取り組み方の質が変わった生徒は少なくありません。今までは「やるのが当たり前」だと思っていたから嫌々机に向かっていただけ、何のためにやるのかを思い出しながら、前向きに勉強に取り組めるようになったと、生徒は話していました。

**久保島** ただ、そうした生徒の変化は、教師が簡単にコントロール出来るものではなく、やはり時間を掛けて待つべきものだと思います。今回、ファシリテーターの方が話し合いの中で、「自分の思いを語った相手に、必ず『なぜ?』と聞いてあげてください」と生徒に言っていました。「なぜ?」と問い掛けられた生徒は、一生懸命に説明しようとしていました

が、それは今思うと、生徒に変化を促す1つのスイッチだったのでしょう。効率性が求められる授業では、常に出ることはないかもしれませんが、私たちが教師も留意すべき指導のポイントなのだと思います。

### 教師にも 対話する機会が必要

——未来PJの実施によって、生徒だけでなく、教師にもさまざまな影響があったのではないのでしょうか。

**前中** 本校では、生徒向けの未来PJを実施する前に、デモンストレーションという形で、教師対象のワークショップをファシリテーターの方に行っていたいただきました。実際にワークショップに参加することで、「なぜ学ぶのか」を他者に伝えることは決して簡単なことではないと、私たち自身が理解できました。今の高校生が、「勉強の意味や目的が分からなくても、それでもやるしかない」という感覚になってしまっているのは、もしかすると私たち教師が

そうした感覚で学びを捉えたまま、生徒に接しているからなのかもしれないと思います。そういった意味では、教員の研修としても価値がある取り組みだったと思います。

**中村** 私は教師になって25年ほど経ちますが、新任の頃に比べると明らかに職員室での雑談が減っています。「雑談する暇があったらこの課題の採点を済ませなくては」などと、やらなければいけないことが山積みで、それはきつと国公私立を問わず、どの高校も同じだと思います。そういった状況ですから、仕事上の関わりのない先生とは本当に会話をする機会が少なくなっています。思ったことを語り合う場合は、生徒同様、私たち教師にもますます必要になっていく気がします。

**西山** 生徒向けであれ教師向けであれ、こうした取り組みを校内に広めていくためには、教師間のコンセンサスが必要です。その際、全員が納得しやすいのは、やはり取り組みの成果が何らかの数値で表れた時です。ですから、未来PJの成果を客

観的に把握できるような仕組みが出来ればと思います。ただ、その一方で、具体的な成果を焦ることで取り組みの価値を見失う恐れがあることも十分理解しています。

**前中** 生徒の変化を数字で説明できない部分は、教師自身がどれだけ実感できるかが鍵なのでしょうね。数字に出来ないものの中にも大事なものがあつて、私たち教師は十分に分かつているのですから。

**久保島** 校長としては、未来PJのようなワークショップに先生方が参加することで、授業でアウトプットする機会をつくることの大切さを実感していただきたいと思っています。もちろん、ワークショップでの体験を授業やHRで生かそうとするのなら、教師にもファシリテーターとしての力量が必要ですから、適切な研修の場も設けていくべきだと思います。

**中村** 外部の方をファシリテーターとして招く場合も、生徒たちの特性を私たち教師がファシリテーターにしっかりと伝えることで、より自校に合ったワークショップを実現できるはずですよ。



「人は、なぜ学ぶのか」を自分の言葉で語ることが、私たち教師には求められている」前中

### 日常の中に小さな場を数多くつくっていく

——未来PJのワークショップは、学校の中では非日常の時間だったと思います。今回の経験の中に、先生方が日々の授業やクラス経営などに生かせる点はありましたか。

**前中** 今考えているのは、小論文指導です。多くの学校同様、本校でも小論文指導は3年生になってから本格化します。しかし、入試のための書き方指導が3年生からであったとしても、小論文が課される学部系統を指す2年生を対象に、未来PJのような対話の場を設けて、書くための引き出しを多くつくってあげると良いのではないかと思います。

**西山** 私は今年度から、新聞記事に目を通して、授業中に意見を書く取り組みを始めましたが、ただ書くだけではなく、生徒同士で読み合い、

コメントを付けて相手に返すという取り組みをしています。自分の意見を持ち、それを相手に伝え、そしてその反応を返してもらおうコミュニケーションの場をたくさんつくっていきたくと思っています。

**中村** ワークショップ後の変化の速度は、生徒によって違うでしょうか、事後アンケートを踏まえつつ、個別面談などを重ねながら、生徒一人ひとりの変化を見守っていきたくですね。また、個人的には、新入生向けの取り組みとして、未来PJのようなワークショップをやってみたくと思っています。高校生になって意識も高まっている時期に、何のために学ぶのかを新しい仲間と考えることは、学習意欲や進学意識の向



「入学直後、学びの意味を語り合うことは、学習意欲の向上や人間関係の構築につながる」中村

上、更にはクラスづくりの面で有効だと思えます。人間関係が構築されていない時期だからこそ、抵抗感なく本音が言い合えるというメリットもあるでしょう。1年生の学年団に配属された教師にとっては、1年生と一緒に学びの意味を考えることが、3年間の高校生活を見通す研修のような機能を果たすはずですよ。

**久保島** 未来PJのような大掛かりな場も必要ですが、日常の中に小さな場を数多くつくることも大切だと強く思います。本校では、今年度から主体性の育成を目的に、全校集会などで教師の代わりに生徒が前に立つようにしています。もちろん、教師が前に立った時のようにすぐに整列が出来ないわけはありませんが、先生方は焦らずに生徒の成長を見守ろうという気持ちでいます。そうした小さな場を積み重ね、待つことが、生徒の意識を耕すことになるのではないのでしょうか。

## 寄稿

2012年12月26日(水)、27日(木)の2日間、東京大・福武ホール内福武ラーニングスタジオにて実施された、ポスト3.11 高校生未来プロジェクト『学び』がボくらを、社会を変える」の企画協力者である苅谷剛彦先生から、学校実施型という新たな展開にあたって寄稿いただきました。

## 「高校生未来プロジェクト」が示す、更なるターゲット

オックスフォード大教授／元東京大教授 苅谷剛彦

社会と自分の学びとのつながりを意識することで、高校生の学習意欲はどのように変化する可能性があるのか。そのような課題意識を持って、私は「高校生未来プロジェクト」の企画段階からかわり、また2012年12月に全国から応募した高校生を対象に東京大・福武ホールで行われたワークショップにも講師として参加した。その時から感じていたことは、こうした特別の場を超えて、同じような試みが学校を単位にしても実行できるか、という課題であった。更には、学校に場所を移すことで、日本の高校教育が抱える問題も浮き彫りに出来ると考えていた。その後の「高校生未来プロジェクト」の展開は、まさにその点での実施の試みであった。その成果を判断するためには詳しい調査報告を待たなければならないが、今回、この試みに参加した生徒や実施を担った教師の発言から浮かび上がる論点について考えてみたい。

第1に、可能性が開かれた（少なくともそれが示唆された）ことである。実施する学校側が解決すべき問題（教師たちの負担や、時間のやりくり、外部のファシリテーターとの協力関係など）は残るにせよ、学校という場においても通常の授業や進路指導とは異なる話し合いの場を設定することで、生徒たちの意識の変化を引き起こす可能性が示された。特に通常の学校で実施することにより、「生徒同士、普段真面目な話をする機会がない」「真面目な話をするに消極的になっている」生徒たちの関係を切り崩す可能性も示された。恐らくは、そういう場面に立ち会うことによって、教師たちの側にも旧態とした授業でのコミュニケーションのあり方の限界に気付く機会を提供できただろう。その意味では、教師と生徒との関係にも変化を起こす契機が含まれてもいる。このような関係の変化は、授業の中でのコミュニケーションのあり方をも変えていく（「正解」を求める上下の関係から、思考の展開を求める

開かれた関係へ）可能性を秘めている。

第2に、可能性の裏返しとして、高校での教育と学習の課題も浮かび上がった。今回のような機会がなければ、生徒たちは真面目なテーマで語り合うことをせず、授業でも、自分の頭で考え、それを言葉にする機会が少ない。教師も余裕がないため、そのような機会をつくれぬ。それが日本の高校教育の「日常」だとすれば、そういう教育の機関・期間を通して一体どんな人間が育つのだろうか。

正解のない問題の多くは、実は生徒たちの将来の生にとっても重大な問題であり、耳を塞ごうと目を閉じようと逃れようもない地球大の大問題や、よりよく生きるためには避けて通れない、人間にとっての重要課題である。日本の高校教育は、そういう問題に立ち向かうことから生徒を遠ざけ、学習を消化している面もあるのではないだろうか。他の先進国であれば、少なくとも大学に進学するような生徒たちの中では、普段の授業を通じて当然身に付けている討議する力（他者の意見を理解しつつ、知識を基に自分の考えを組み立て論理的に発言できる能力）を、日本の高校はまだ十分育てられているとはいえない。そういう教育の現状を今回の学校実施型の取り組みは浮かび上がらせたのだ。

そう考えると「高校生未来プロジェクト」の更なる課題は、地道に学校レベルでの実行可能性を探ると同時に、そのプロセスを通じて、このような改善すべき喫緊の課題を出来るだけ多くの教師や生徒たち、そして行政を含む教育関係者に気付かせる機会となることである。学びの意欲を高めた先に、もう1つ大きな照準がある。学校への普及の過程で直面する困難さの中にこそ、未来に向けた高校教育の課題が如実に示されているからである。



# 小・中・高の教師が共に語り オピニオンをつくる

## 「Teachers' cafe」第2回ワークショップ報告

座談会でも語られていたように、今ある課題や今後起こり得る課題を把握し、その解決策を考えるためには、生徒だけでなく、教師にも対話が必要だろう。そうした場の1つとして、ベネッセ教育総合研究所は、学校種を超えて教師が教育について語り合う「Teachers' cafe」を主催。今回は、その第2回の模様を報告する。

### 「テストがなかったら」を前提にして、教育の根本に迫る

第1回のワークショップの様子は、本誌2014年2月号で報告した。第2回は、第1回の参加者に加え、20〜60代の幅広い年代の小・中高の教師27人が全国から集まった。今回、議論をより深めるため、自己紹介後、第1回のオピニオンを書いた模造紙を掲示し、前回参加者によるポスターセッションを行い、内容の共有を図った。更に、ベネッセ教育総合研究所の研究員が、子ども学習意識調査の結果や今後100

年の世界・日本の動向を踏まえた社会環境の変化予測を報告。子どもはどんな社会を生きていくことになるのか、その時に求められる力は何かを思い描くための情報を伝えた。

議論の進め方は、今回もワールドカフェ形式を採用。まず、小・中・高の教師が混合のグループをつくり、「テストや受験がなかったら、子どもに何を身に付けさせたいか」をテーマに語り合った。グループを2回替えながら、地域も学校種も年齢も役職も違う教師の思いを聞き、視野を広げていった。「テストや受験がない」という前提に対しては、「そんなことを考えたこともなかった」といっ

た声も聞かれたが、「評価がなければ何を教えたいか」「社会で生きるにはどんな力が必要なのか」など教育の根本へと議論が深まっていった。

メインは、オピニオンづくりだ。課題意識が近い者でチームを組み、「12年間で身に付けさせたい力を小・中高でどのように教えるか」をテーマに議論をまとめた。チームで用いる言葉は違うが、「社会を生き抜くためにどんな力を付けさせたいか」「そのために教師がすべきことは何か」という課題は共通しており、教師たちの根底に流れる熱い思いは学校種を超えて同じだと確認できた。

また、後日、ワークショップを振

り返るきっかけとして、チームの代表の先生にオピニオンの内容を整理したレポートの提出を依頼した。

日々の指導で忙しい教師にとって、学校種や立場を超えて、教育について熱く語る機会に限られているようだ。参加者からは、「貴重な経験が出来た」「新しい知見を得た」といった声が聞かれた。また、第2回ではベネッセコーポレーションの社員も議論に参加することで、学校現場への理解を深めることが出来た。今後も「Teachers' cafe」のような機会を持ち、学校種や地域を超えて教師たちをつなぎ、共に学校教育について考えていきたい。

## 第2回ワークショップ概要

- ◎目的 小学校、中学校、高校の教師たちが率直に語り合い、「12年間で何をどのように教えるか？」を共に考え、現場教師発のオピニオンとしてウェブサイトなどを通じて発信すること
- ◎日時 2014年2月1日(土) 13:00～18:30
- ◎参加者 全国の教師27人(小学校10人、中学校8人、高校・大学9人)
- ◎募集方法 『VIEW21』小学版・中学版・高校版の各読者モニターへのご案内など
- ◎会場 (株)ベネッセコーポレーション新宿オフィス
- ◎主催 ベネッセ教育総合研究所「Teachers' cafe」事務局
- ◎企画運営協力・当日ファシリテート 與良(よら) 昌浩氏(株式会社もくてき)、宮崎圭介氏(株式会社スコラ・コンサルト)

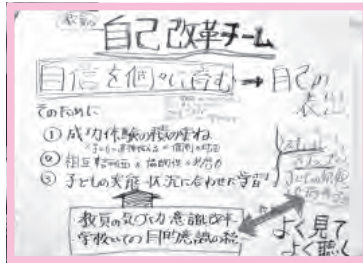
## ワークショップの流れ

- 13:00 オリエンテーション、自己紹介
- 13:40 前回の内容を共有 第1回参加者によるポスターセッションを行い、前回の内容の振り返り・共有。
- 13:50 視野を広げる ベネッセ教育総合研究所から、教育を取り巻く社会環境予測について情報を提供。
- 14:00 問題意識を共有する 4人1組となり、ワールドカフェ形式で「テストや受験がなかったら、子どもに何を身に付けさせたいか」をテーマに語り合う。1ラウンド15分で、グループを替えながら3ラウンド。
- 15:10 オピニオンをつくる 「12年間で何をどのように教えるか？」について、課題意識に近い者同士がチームをつくり、オピニオンをまとめる。
- 17:00 発表 9チームがそれぞれのオピニオンを発表。
- 17:40 まとめ

## 各チームのオピニオン \*全チームのオピニオンはウェブサイトをご参照ください

## テーマ・12年間で身に付けさせたい力を、小・中・高でどう教える(育む)か

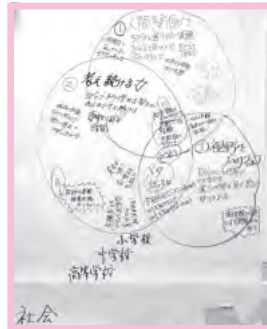
## チーム「教員の自己改革」



◎児童・生徒と接する教師自身の教育観の改革に焦点を当て、議論を深めていきました。小学校・中学校・高校と、児童・生徒の発達段階が

それぞれ異なっている、見るべき指導のポイントには共通点も多いはず。「連携」の意味を、いま一度問い直しました。

## チーム「協力」



◎小・中・高が共通して取り組むべき指導の形として、「子どもが『夢中になれる時間と場所』をつくる」「安心して失敗できる環境(仲間と空間)をつくる」「『見直し』と『振り返り』を通して自己理解を深め、子どもの『メタ認知能力』を育む」の3点を挙げました。

これらを実現するためにも、子ども参加型のアクティブラーニングへの転換が必要だと提言しています。

## 参加した教師たちからの意見・感想

- ・学校種が異なる先生と話すことによって、「学校教育ですべき根本」が見えてくるのだと感じます。その根本を、行事、教科学習、総合的な学習の時間など、教育活動に沿って考えていきたい。(小学校/北海道)
- ・他の学校種、他地域の先生方と話し合いができ、共通するものがたくさんあると分かった。教育についてこんなに熱く語る機会は今までなかったのだ、とても有意義だった。(小学校/秋田県)
- ・先生方との前向きな議論を通して、自分にはない、新しい知見を得ることが

- 出来た。「子どもへの教育」ということで、私たちは同志だと感じました。(中学校/新潟県)
- ・前回とテーマの関連性が高かったので、内容を深化できた。もし、テーマが変わったとしても、学校種・地域の異なる教員が集まって熟議し、オピニオンづくりをまたやりたい。(中学校/愛媛県)
- ・今後の社会環境の変化の予測を聞き、50年後、現在の学校制度があるのかどうかを考えた。存続させることを考えるのではなく、変化を考えなければいけないと強く思った。他の学校種の先

- 生方から得られた気付きは多く、教科指導の改善だけでなく「学校」を考える上で、とても有意義だった。(高校/宮城県)
- ・100年という長いスパンで日本を見るという視点が面白く、非常に興味を持った。一般企業や行政の方も参加できるようにすると、具体的な話が出るだろう。今後に期待したい。(高校/三重県)
- ・いろいろな意見を認め合いながら、時間内にまとめる作業は緊張感もあったが、とても達成感があった。(高校/岡山県)

## Teachers' cafe 2014 開催決定

他の学校種の先生方とのワークショップを通して、長いスパンで教育について議論を深めます。詳しい内容や応募方法は下記ウェブサイトをご覧ください。

◎次回開催についてのご案内や当日の様子の動画は、ウェブサイトでご覧いただけます

Teachers' cafe ベネッセ

で 検索

<http://berd.benesse.jp/tcafe/>

7/26(土) 東京都新宿  
8/9(土) 福岡県博多

参加  
無料



兵庫県立  
神戸高校

学校改革

# 伝統校が更なる 信頼醸成・実績向上に 向けて改革に着手

◎「質素剛健」「自重自治」を校訓に、文武両道を目指した教育を展開する。2004年度から3期連続でスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けている。13年度にはSSH科学技術人材育成重点校（中核拠点）の指定も受け、兵庫県における理数教育の中核としての活動を展開する。

設立	1896(明治29)年
形態	全日制／普通科・総合理学科／共学
生徒数	1学年約360人
2014年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、大阪市立大などに262人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ705人が合格。
住所	〒657-0804 兵庫県神戸市灘区域の下通1-5-1
電話	078-861-0434
Web Site	<a href="http://www.hyogo-c.ed.jp/~kobe-hs/">http://www.hyogo-c.ed.jp/~kobe-hs/</a>

変革のステップ

背景

◎兵庫県の学区再編により、2015年度入試から神戸市は3学区から1学区に。また、教員採用数の増加により、校内の若手教師の比率が高まった

実践

◎全校の教員研修会等で指導を伝承しながら、3年次での外部の記述模試の導入、大学と連携した説明会の実施など、進路指導の見直し、改革に着手

成果

◎改革の具体的な施策について多様な意見が出される。神戸高校の将来を見据えて、より良い学校づくりに向けた議論がなされている

学区再編により成績上位層の  
1校集中の可能性が浮上

兵庫を代表する進学校の1つである兵庫県立神戸高校は、神戸港を見下ろす高台にあり、古城を模した優雅な校舎はイギリスのパブリックスクールの理想を体現している。赴任1年目の尾原周治おぼしむらじ教頭は、生徒の印象を次のように語る。「生徒は、部活動に一生懸命取り組む一方、勉強にも手を抜かず、練習や遠征の合間を縫って自学に取り組んでいます。『質素剛健』『自重自治』の校訓が、生徒の間にはしっかり根付いていると感じます」

進学実績も好調で、東京大・京都大・大阪大・神戸大に合わせて例年100人以上が合格する。良き伝統を受け継ぎ、実績を上げ続ける同校だが、学校を取り巻く環境は大きく変わりつつある。1つは学区再編だ。兵庫県の公立高校の学区は、2015年度入試において、現行の16学区から5学区に再編され、神戸市では3学区から1学区となる。同校及び兵庫高校、長田ながた高校という各学区の進学校が同一学区になるため、「選ばれた学校」として、これまで以上に魅力を打ち出す必要に迫られていた。進路指導部部長の森川喜一よしかず先生は次のように話す。

「本校は学区のトップ校として、地域から揺るぎない信頼を得てきました。それは、全ての教師が、生徒の夢をかなえたいという思

いを持って指導に取り組んできた証<sup>あかし</sup>です。しかし、学区再編という大きな環境変化を迎え、今までと同じ指導だけでよいのかと考えるようになりました。もちろん、学校の評価は、進学実績だけで決まるものではありません。しかし、本校への進学希望者の半数以上が、本校のアンケートにおいて『進学実績が進学したい高校決定の大きな要因となる』と回答したことを考えると、その期待に応える責務が学校にはあると思います。現在、神戸市の上位3校だけで、京都大・大阪大・神戸大の



兵庫県立神戸高校教頭  
尾原周治 おはら・しゅうじ  
教職歴30年。同校に赴任して1年目。「卒業式の後、生徒が『この学校に来て良かった』と言える学校をつくりたい」



兵庫県立神戸高校  
森川喜一 もりかわ・よしかず  
教職歴37年。同校に赴任して7年目。進路指導部部長。「どんな局面でも生徒が持てる力を出し切れるよう、学習・生活両面から支援し続けたい」



兵庫県立神戸高校  
西村達 にしむら・たつし  
教職歴24年。同校に赴任して12年目。進路指導部次長。「幅広い視野を持ち社会で活躍できる人となるよう、あらゆる場面で生徒を支援したい」



兵庫県立神戸高校  
雲田彩加 くもだ・あやか  
教職歴1年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「学校生活のさまざまな場面を通じて、人間教育を行い、社会に貢献できる大人に育てたい」

合格者数は、毎年約250人くらいはあります。この合格者数が学区再編によって1つの公立高校の進学実績となり得る可能性がある中、その可能性を実現できる学校となるためには何をすべきなのかを、今こそ考える必要があるのだと思います。それが、5年先、10年先の本校の財産になるはずですよ」

校内の若手教師の増加も課題だった。以前は、同校に赴任してくる教師の大半が他校で経験を積んだ者であったが、団塊世代の大量退職を迎えて、12年度から毎年教職1、2年目の若手教師が複数名、同校に配属されるようになった。蓄積してきたノウハウを若手に伝え、全体の指導力の底上げを図ることも喫緊の課題だった。

### 実力考査・外部模試の併用で 指導の質の維持・向上を図る

12年度、同校が初めて3年次に外部の記述模試を導入したのは、そうした意識の表れだった。同校では、校内で問題を作成する「実力考査」を大学入試の合格可能性判定に活用してきた。実力考査は、1・2年生では年3回、3年生では年5回実施していたが、そのうち3年生の10月考査を進研模試（記述）にした。若手教師が増える中でも指導の質を保つことが、外部の記述模試導入の狙いだった。

「実力考査は、近年の大学入試の動向を分

析し、どのような問題が出ているのか、どのような力が問われているのかを踏まえて作問します。経験の浅い先生が、本校に赴任してすぐに問題を作るのは至難の業です。その上、入試の実態とずれていることに、教師が気付かないまま3年生を迎えたら、手遅れになりかねません。そうした事態を防ぐためにも、全国の学校と客観的に比較できる外部の記述模試を併用しようと考えました」（森川先生）  
3年次での外部の記述模試の導入は創立以来の変革だが、それによって実力考査の重要性が揺らぐことはない。実力考査では、入試の過去問などは使用せず、必ず教師がオリジナルの問題を作成し、それを教科内で検討する会議を4、5回開く。この作問・検討の過程が、教師の指導力を維持・向上させる土台であると、進路指導部次長の西村達先生は指摘する。

「実力考査の問題作成は、本校に赴任して最初にぶつかった大きな壁でした。自分より若い先生から『この問題では駄目です』と言われることもありましたが、はつきり指摘してもらったからこそ指導力の向上につながりました。学校全体として指導力を妥協なく高めてきた文化は、本校の伝統です」  
赴任1年目の雲田彩加先生は、実力考査の作問はまだ担当していないものの、定期考査で先輩教師の指導を受けながら経験を積んでいる。

「私が作った問題に対して、毎回、『問題量

が少ない』『記述問題を増やした方がよい』といった具体的な指摘をいただけるので勉強になります。先輩方は、定期考査に加え実力考査を年4回も作っており、その労力と情熱は並大抵のものではないと感じます」

## 実力考査に基づく研修会で 進路指導のノウハウを共有

実力考査後にも、毎回学年・教科で検討会を開いて結果を分析し、それを授業改善に生かすために、正答率の低かった問題を授業で解説したり、教え方を工夫したりしている。分析結果は、月3、4回発行する進路通信『自己実現』を通して生徒にも公表する。中には、自らフィードバックして、自身の弱点の克服につなげている生徒もいるという。

更に、13年度には初めて、合格大学と実力考査の結果分析に基づく全校での教員研修会も開いた。同校では、生徒一人ひとりについて、1〜3年生の成績、実際の合格大学などのデータが毎年蓄積され、参照できるようにになっている。進路指導の指針となる重要なデータだ。

「長年本校に勤務している先生なら、生徒がどの程度伸びていくのかが感覚的にも分かっています。経験の浅い先生にはそれかなかなか見通せません。客観的なデータを基にした考え方や分析ノウハウを共有すること

で、若手教師の指導力の向上を図ると共に、ベテラン教師も同じ目線で指導に当たることが出来ると考えています」（森川先生）  
実力考査を通じ、生徒と教師が共に成長していく仕組みが、同校の実績と信頼を支えている。

## 進路通信は進路指導部が 学校内外に示す「心意気」

模試の改革と共に、同校が力を入れているのが、進路意識の深化・明確化である。

「私が赴任した十数年前と比べると、教師の指示に素直に従う、聞きわけのよい生徒が増えました。しかし、周りに振り回されずに、自分の意志を貫き通す姿勢は弱くなっていると感じます。ただ、それは表に出てこないだけで、内面に思いを秘めているのだと思います。さまざまな刺激を与え、潜在的な力を引き出したいと考えています」（西村先生）

13年度からLHRで職業研究、学部・学科研究を始めたのも、その一環である。将来何がしたいのか、それを実現できる職業は何か、1年生1・2学期を使って調べ学習を行い、1年生後半の文理選択に生かす。同年7・11月には、初めて大阪大と京都大の職員を招いての大学説明会も開催した。

「両大学の入試課職員に入試結果の報

告などをしていただきました。それまでは、生徒が大学を訪れたり、学校で大学の出前講座を開いたりすることはありましたが、入試課職員に来ていただくのは初めてでした。生徒は大学に一層親しみを感じ、入学したいという思いを強くしたようです」（森川先生）  
年間に40号程発行している進路通信『自己実現』は、生徒にエールを送り、勇気を与えるためのツールだ（図）。進路行事の通知や実力考査の分析結果などの情報の他、「3年という学

図 「自己実現」 センター試験激励号



センター試験当日、生徒に配布した『自己実現』のセンター試験当日版。教師一人ひとりの名前と激励のコメントが記されている。写真は、同校オリジナルの旗。センター試験当日、尾原教頭らが旗を持ち、生徒を励ました。



\*学校資料から抜粋して掲載

年は『高校生活のゴール』と『新たなステージへの飛躍』が共生する学年』など、生徒を鼓舞する言葉が並ぶ。『自己実現』は3年生対象だが、1・2年生にも進路通信を各学期1〜2回程度発行し、低学年次からの情報提供に努めている。

「進路通信の作成は大変ですが、これを発行し続けることによって、私たち教師の心意気を、生徒や保護者に伝えることになると考えています」（西村先生）

13年度には、全校生徒の保護者を対象にした進路研修会をPTAと共同で開催。継続実施を望む声が多く、今後も、大学や保護者と連携した進路指導を続けていく考えだ。

## 多様な意見を交わすことが 更に良い学校づくりにつながる

環境変化を見据えて改革に着手した神戸高校だが、具体的な施策については校内でさまざまな意見があり、議論をしながら進めている過程だという。

「実力考査や進路通信は、情報共有や若手教師の育成という面もさることながら、実はそれ自体が、先生方の目線を合わせ、思いを1つにするための取り組みでもあります。私自身も、そのための実践を進めてきました。どこまで学校を変えるべきかという議論では、ためらう場面も少なくありません。そ

## 若手教師が語る、指導変革への情熱

### 生徒と共に 成長している自分を実感

進路指導部 雲田彩加

教職1年目で、県内でも上位の進学校である本校に赴任しました。赴任が決まった時には、私よりも勉強の出来る生徒を教えなければいけないというプレッシャーにとらわれ、教師として自分に何が出来るのだろうかと不安でいっぱいでした。しかし、赴任してみると、生徒は私の指導を素直に受け入れてくれ、指導で困ることはありませんでした。授業の内容で質問を受けることも多く、生徒への指導を通して、私も一緒に成長していることを実感しています。

そうした生徒の姿と共に、この1年で私が最も刺激を受けたのが、ベテランの先生方の指導に対する情熱と信念です。私は高校時代に校内実力考査を受けた経験がなく、合格可能性判定のための外部模試を受けただけでした。本校では定期考査の他にも、オリジナルの実力考査の問題を年3、4回作成し、毎回、結果を分析して、授業改善や生徒への声掛けに生かしています。そうした徹底した実践こそ、生徒のためになる進路指導なのだと思感すると共に、高校時代には分からなかった教師の大変さを感じ、身が引き締まります。

生徒のため、学校のためになることは、私自身にとっても必ず成長の糧になるはず。一朝一夕に出来ることではありませんが、先輩の先生方に支えられながら1つずつ勉強を積み重ねて、教科指導だけではなく進路指導でも生徒たちの力になれるように、努力していきたいと思えます。

ういう意味で慎重になっているのかもしれない。せんが、多様な意見を交わし合う中で、更に強い学校組織が構築されていくのではないのでしょうか」（西村先生）

「これまでの伝統や良さは大切にしながらも、常に先を見て、現状のままが良いのかを問い続けるべきだと思います。今回の学区再編がなかったとしても、不断の変革を図る必要があると、私は考えます。実績が下がってから動いたのでは、生徒や地域に対して責任を果たしたとはいえません。マイナスになる改革はもちろん不要ですが、プラスかマイナスか分からないのなら、まず動き、改善を加えればよいのです。現状では問題が顕在化し

ていなくても、常に学校のあり方を見直すことが、5年後、10年後も、神戸高校が地域の信頼を得る学校であり続けるために必要だと思えます」（森川先生）

尾原教頭は、同校の今後の改革について次のように語る。

「伝統校ほど新しいことに取り組むためには大きなエネルギーが必要です。管理職としてはこの改革がスムーズに行えるよう、組織の見直しや組織間の連携を図っていかねばなりません。本校の全ての先生が『生徒のため』という思いを持っています。それがある限り、改革を巡る議論が更に良い学校づくりにつながると確信しています」

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年10月号指導変革の軌跡「新潟県立新潟高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

# 「もっと響く指導」に するために！ 生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を2006年から12年まで伝えてきた「生きたデータの徹底活用」のコーナー。更に響く指導を実現するために、これまで掲載した記事を基に現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

## テーマ 1年生1学期 保護者への意識付け



「生きたデータ」2007年6月号を参考に、  
保護者に情報発信したところ……

### ●「高校生の保護者」として知っておきたいポイント

#### ●学習や生活に関するポイント

- 規則正しい生活習慣と希望進路実現の相関関係は非常に高い
- 部活動の有無を問わず、起床・家庭学習開始・就寝の3点の時間の固定が大切
- 学校の教育方針、育てたい生徒像を知っている
- 子どもの勉強中は親は読書するなど、家庭内に勉強する雰囲気をつくる

#### ●文理選択、入試に関するポイント

- 教科の好き・嫌いではなく、就きたい職業や学びたい学問を踏まえた文理選択を行う
- 子どもの特徴や特性、適性を平素からできるだけ多面的に見るようにする
- 少子化＝大学入試易化は早計。大学によっては難化が進んでいる
- 学費以外の国公立大のメリットや、私立大の特色ある教育内容に目を向ける



#### 私の狙い

「高校生の保護者」として知っておいてほしいことを伝えることで、学校への信頼感を醸成したかった

#### 取り組み内容

1学期の保護者会で配布する資料の中に「知っておきたいポイント」をまとめ、保護者に自己点検してもらうようにお願いした

#### 感じた課題

出来ていないこと、知らないことがあっても、具体的に何をすべきかが分からず戸惑う保護者が少なくなかった。結果的に学校と保護者の距離が広がったように感じた

「もっと響く指導」  
のポイント

1

保護者の不安やニーズを探り、  
期待感を高める発信につなげる



もうすぐ1年生の保護者会です。私は進路部に所属しているので、今回の保護者会で配布する資料を作成しています。以前、1年生の担任をした時に「高校生の保護者」として知っておきたいポイントをまとめ、保護者会で説明しました。こちらとしては「こういう状態を一緒に目指しましょう」と呼び掛けたつもりでしたが、保護者からは「私の知らないことばかり」「うちの子どもは全く出来ていない」と反応され、意に反して不必要なプレッシャーを与えてしまった面もあったようなのです。



それは、以前配布した資料が「チェックするだけ、伝えるだけ」というトーンで書かれたために、保護者が読んだときに不安や焦りを感じ、またチェックした後にはどうすればいいかが分からず戸惑ってしまったからかもしれません。確かに保護者に知っておいてほしいポイントなのですが、1つひとつは簡単なことではなく、この時期には出来ていないこと、理解できていないことがむしろ当たり前である内容も少なくありません。そうしたニュアンスが保護者に伝わらなかったのでしょうか。



そうなんです。情報として「伝える」ことは出来たかもしれませんが、「学校としての意図が伝わる」ことがなかったように思います。



保護者会の目的は、学校と保護者のチーム化です。そのためには、保護者の不安や疑問を学校がくみ取っていることを保護者に伝えたいですね。

\*このコーナーは、高校の先生方（今回は中国・四国地方）との検討会の内容を基に構成しています。

#### 若手先生代表

四国地方の公立高校に勤務。14年度は2回目の1学年担任。



A先生(30代)

#### 中堅先生代表

四国地方の公立高校に勤務。14年度は1学年主任を務める。



B先生(40代)



## 「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」活用改訂案

### STEP 1

保護者に対して「こうあるべき」という理想像を提示するのではなく、出来ていないこと、気掛かりなことを尋ねる文言に修正する。1つひとつの内容は「本来はこうであってほしい」というものだが、保護者は「出来ていないことがあっても不思議ではないのだ」と受け止めやすくなる。

#### ●保護者会に先立って「高校生の保護者」の不安やニーズを探るチェックシート

#### ●お子さんの学習や生活に関して気になる項目をチェックしてください

- 子どもは、高校生になって生活習慣が不規則になった
- 子どもは、起床・家庭学習開始・就寝の3つの時間が日によってまちまち
- 学校の教育方針、育てたい生徒像が分からない
- 家庭内に勉強する雰囲気をつくれていない

保護者に知っておいてほしいポイントを、保護者目線を心掛けて記述すると、印象は大きく変わる。書き方がよく分からない場合は、先輩教師に尋ねると、よい言葉が返ってくるだろう。

#### ●文理選択、入試に関して気になる項目をチェックしてください

- 子どもは、大学や将来の職業のことを十分に考えて文理選択しようとしているように思えない
- 子どもの特徴や特性、適性が分からない(分からなくなってきた)
- 大学入試(入試方式、入試科目・配点、難易度、倍率など)のことがよく分からない
- 成績以外にどんな視点で大学を選べばよいか分からない

### STEP 2

保護者に気になる項目をチェックしてもらった結果を集計することで、その年の保護者に発信すべき情報の優先順位が見えてくる。ニーズの多い情報については、保護者会や夏休み前の三者面談で話題として取り上げたり、右のような形式でまとめて学年通信などの文書で伝えたりしてもよい。保護者の不安や疑問にタイムリーにこたえることで、学校に対する信頼感、期待感を高めることが出来るだろう。

学年通信例 ▶▶▶

#### 1年生1学期 保護者が気になる上位3項目を解説します

##### 1位 大学入試(入試方式、入試科目・配点、難易度、倍率など)のことがよく分からない

学年より◎近年、大学入試の仕組みはますます複雑化しています。本校では学年通信の9月号、10月号で「国公立大入試の仕組み」「私立大入試の仕組み」を解説する予定です。また、9月には外部講師を招いた……

##### 2位 子どもは、高校生になって生活習慣が不規則になった

学年より◎入学者説明会で配布した資料でもご紹介しましたが、規則正しい生活を送ることは希望進路の実現と高い相関があります。では、生活習慣を規則正しくするために、保護者の方にはどんなサポートが……

「もっと響く指導」のために  
改訂すると……



保護者会資料に「伝える」だけでなく、「不安やニーズを探る」役割も持たせてはどうでしょうか。ややもすると学校からの発信は「伝えたいこと」ばかりになり、保護者が知りたいことと乖離してしまうこともあるようです。上の例のように目的(不安やニーズを探る)を明示すれば、伝えたいポイントを「出来ていないかもしれない」という前提で表現できますし、チェック結果を集計して保護者ニーズの把握につなげることも出来ます。



これなら学校として大切なポイントを伝えることが出来ますね。保護者の不安感をあおることも少ないはずです。また、保護者は学校と双方向のやりとりをしている実感を得られそうですね。こうした保護者ニーズの分析を学年団で共有していけば、今後の学校からの情報発信に役立てることも出来そうですね。



ええ。事前に配ることが難しければ、保護者会当日に配布し、会の終了時までにはチェックしてもらってもいいですね。把握した保護者の不安や疑問には学年通信などで継続してこたえればよいのですから。

### プラスαの検討ポイント

From 編集部

#### 配布資料に さまざまな 工夫を施し 指導の核を伝える

今回の記事の検討会では、保護者向けの情報発信について、先生方がそれぞれの工夫をご紹介くださいました。例えば、キーワードを空欄にして穴埋め式の配布資料にすることで、資料そのものや説明に対する関心度を高めている先生もいらっしゃいました。「せっかくの機会なので、あれもこれも伝えたくりますが、学年団として『これだけは』という指導の核を明確にした発信が必要です」(30代の先生)。保護者の知りたいこと、学校としてぜひ伝えたいことという2つの視点で、発信内容を精選する作業が必要なようです。



「生きたデータ」2007年6月号を参考に、指導フローの作成に取り組んだところ……

●卒業生の進学状況

生徒	入学時点の学力 (進研7月全国模試)	入学時点の進路志望	入学時点で部活動加入	入試直前の学力 (進研10月全国模試)	入試直前の進路志望	部活動継続状況	志望校の可否	3年間の様子
A	SS65.5	専門学校	バドミントン部	SS72.6	旧帝大文学部	3年間継続	○	予習重視のスタイルを2年間継続し、授業中に内容を理解するよう努力。定期考査や校内模試にもきちんと取り組んで学力を維持した。
B	SS61.5	国立4年制大	サッカー部	SS61.1	国立ブロック大法学部	3年間継続	○	定期テスト前には苦手科目に取り組み、部活動引退後は平日5時間の学習時間を確保。数か月後、急激に学力が向上。2次試験直前まで伸び続けた。
C	SS59.2	短期大学	なし	SS56.3	国立ブロック大教育学部	なし	○	1年次より予習や課題をきちんと自宅でこなし、分からないことは教師に積極的に質問した。放課後のゆとりを生かし、安定した学習量が確保できた。
D	SS59.0	国立	なし	SS54.7	地元国立大	なし	×	予習をしたりしなかったりということが3年夏まで続いた。自分なりの勉強方法が定



「もっと響く指導」のポイント

②

「共に育てる」信頼関係の醸成につなげる  
合格までの道のりを我が子と照らし合わせ、

私の狙い

進学実績を、大学別の合格者数だけでなく、具体的な生徒像と共に伝えようと考えた

取り組み内容

1学期に実施した保護者会で過去の卒業生の可否結果、部活動の参加状況など、個人情報に留意し、適宜加工しながら紹介した

感じた課題

資料作成のための時間が少なかったため、「3年間の様子」は省略した。そのためか、「合格した生徒像」が今一つ具体的に伝わらなかった



保護者会では、卒業生の進学状況についても説明したいと思います。大学別の合格者数も紹介しますが、「成績が何番だとどの大学に合格しているのか」という関心に留まることなく、「どんな3年間を過ごした子どもが合格しているのか」という点まで踏み込んで理解をしていただきたいと思います。特に、入学時の成績や部活動の参加状況は重要な情報だと思うので、盛り込みたいです。ただ、前回の保護者会では、3年間の様子については、資料作成に掛ける時間が足りず、割愛しました。その結果、入試直前の学力と志望校の可否ばかりが注目され、残念ながら「合格できる生徒像から3年間の過ごし方を考える」ところまでたどり着けなかったように思います。



入試直前の学力や可否は3年間の結果ですから、1年生1学期の発信においても「3年間の様子」は重要です。この時期の保護者には「元気に学校に通ってくればそれでいい」と口にする方もいます。そうした保護者の本音を受け止めつつも、子どもの成長する姿と親がすべきことを明確にするチャンスを逃さないようにしたいですね。卒業生のどんなエピソードを伝えれば、保護者が高校3年間の子どもの変化に期待出来るようになるのかを、保護者会を契機に一緒に考えるようにしてはどうでしょうか。



私たちは、生活習慣や進路意識も「合格力」の欠かせない要素と考えていますが、そうした複眼的な生徒理解を保護者と一緒を進めていくことが必要なんです。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます！

生徒指導・進路指導ツール集

ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp>

生きたデータ

検索

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご活用ください！

HOME→教育情報→高校向け→

生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

2007年6月号 1年生1学期の保護者に対する意識付け



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」作成改訂案

● 卒業生の進学状況



生徒	入学時点の学力(SS) (進研7月全国模試)	入学時点の進路志望	部活動	入試直前の学力(SS) (進研10月全国模試)	入試直前の進路志望	志望校の可否	3年間の様子	1年生夏休み～2学期の様子
A	国 66 数 58 英 69	専門学校	バドミントン部 (3年間継続)	国 69 数 64 英 74 〔得意科目〕 英語 74	旧帝大 文学部	○	予習重視のスタイルを2年間継続し、授業中に内容を理解するよう努め、定期考査や校内模試にもきちんと取り組みで学力を維持した。	各教科の課題をきちんと提出し、小テストもよい成績を収めていた。また得意だった英語は、計画的な学習ができており、学校からの課題以外にも、自主的に学習していた。
B	国 57 数 59 英 63	国立 4年制大	サッカー部 (3年間継続)	国 64 数 56 英 62 〔得意科目〕 日本史 72	国立 ブロック大 法学部	○	定期テスト前には苦手科目に取り組み、部活動引退後は平日5時間の学習時間を確保。数か月後、急激に学力が向上、2次試験直前まで伸び続	夏休みは、部活動のあとは図書館で勉強するなど、生活リズムを固定していた。また、通学時などのスキマ時間を活用した学習も行っていた。
C	国 60 数 55 英 63	短期 大学	なし	国 62 数 54 英 62 〔得意科目〕 世界史 66	国 ブロ 教育		さまざまな観点から、異なるタイプの卒業生を紹介することで、我が子はどんな高校生活を過ごすことになるのか、保護者はイメージしやすくなる。3年生の担任歴がない場合は、いろいろな先輩教師に聞くことで、タテのつながりができる。	ちゃんと自宅教師に頼りゆとりを確保でき夏休み、志望大のオープンキャンパスに参加したことで、学習意欲が高まった。秋以降、苦手科目の対策に取り組むようになった。
D	国 54 数 66 英 60	国立 4年制大	なし	国 52 数 56 英 52 〔得意科目〕 なし	地元 農大		た。	課題を出すことに精いっぱい、優先順位を自分で考えて学習することができないでいた。

「もっと響く指導」のために  
改訂すること……



進学状況を介绍する時に、3年間の様子を盛り込むことは大切ですが、それ以外にもいくつか工夫が出来ると思います。例えば、入学時の成績は下位層だったが、最後は成績がアップして志望校に合格した生徒の3年間の様子を介绍することで、全ての生徒の学力に責任を持つようとしている学校の姿勢が伝わると思いますが、「そうした生徒を育てるために、全員で当たり前のことを徹底しよう」という学年団としての決意表明にもなります。また、学校によっては「合格の決め手になった学習法や教材」まで踏み込んでもよいかもしれません。



学習法や教材ですか……。そこまで細かく情報発信するのは、保護者の受験熱をおおることにつながりそうで、私にはちょっと抵抗感があります。



その気持ちは分かります。ただ、学校によって保護者、生徒の意識は大きく異なりますから、常に「自分が発信するこの情報で、保護者は我が子の3年間をイメージできるか」という点を検証することが必要です。本校も、保護者の入試に対する意識は高いですから、成績も国数英別に紹介し、更に得意科目の有無にも言及するなど、より踏み込んだ発信が必要かもしれません。本校の場合は特にここ数年、際だった得意科目を持った生徒が難関大に合格するケースが増えていますから。



頑張ったけれど不合格だった生徒も紹介したいです。というのは、結果は不合格でも人間的に大きく成長する、つまり「受験を通した成長」を伝えることで、高校教育の意義を保護者と共有できると思うからです。

プラスαの検討ポイント

From 編集部

学校への信頼感を醸成する情報と、保護者への伝え方を吟味する

今回の記事の検討会では、「学校が伝えたいこと」と「保護者が知りたいこと」のギャップが話題になりました。「入試に対して保護者の関心が高い学校では、勉強法についても具体的に言及する必要があるでしょう」と、ある先生はおっしゃっていました。ただ、注意したいのは、それらの情報は全て「学校と保護者のチーム化に寄与するもの」であるべきだということです。学校が保護者と連携して生徒の学習状況を把握した上で指導したからこそ、生徒が成長できたことを保護者に理解していただくことが重要でしょう。

# 「JMOOC」がもたらす 高大接続の新たな形とは？

九州大理事 副学長、日本オープンオンライン教育推進協議会副理事長

安浦寛人<sup>ひろと</sup>

アメリカを中心に世界中で急速に普及が進んでいる大規模公開オンライン講座「MOOCs（ムークス）」その日本版といえる「gacco（ガッコ）」の配信が、2014年4月、日本オープンオンライン教育推進協議会（JMOOC）によって始まった。

新たな形の教育の登場は、学校教育をどのように変えていくのだろうか。JMOOC副理事長で九州大理事の安浦寛人教授に、JMOOCの展開と高校教育との接続について聞いた。

## 双方向のオンライン教育が 教育のあり方を変える

MOOCsは、2012年、アメリカで始まった新しい形のオンライン教育です。その特徴は、正式名称の「Massive Open Online Courses」に集約されています。非常に大規模で、誰でも無料で参加できるようにオープンであり、オンラインで講義を行うというものです。

従来の教育との最大の違いは、「Online」の部分です。オンライン教育自体は日本でも長い歴史があり、放送大学やNHKの通信講座など、テレビやラジオを通して講義を行う形式が以前からありました。これらのメディアが一方通行で講義を行うのに対し、MOOCsではICTを使い、双方向で教育を行うことが最大の特徴です。視聴データを集約することで、受講者ごとのページを何分見たか、何度も見ているペー

## ICTを活用した 本格的なオンライン教育

◎MOOCs (Massive Open Online Courses) は、世界の主要大学の講義をオープンオンライン講座として公開する教育サービスだ。各講座は無料で受講でき、修了すれば修了証を得ることが出来る。2012年にアメリカで始まり、翌年にはヨーロッパやアジア、オセアニアの大学が参加するなど、世界中に広まった。MOOCsの代表的なサイト「Coursera（コースラ）」には、東京大を含む100以上の大学や企業が約650講座を提供し、受講者は750万人以上といわれる。

MOOCsの日本版として13年10月に発足したのが、日本オープンオンライン教育推進協議会（JMOOC）だ。九州大、慶應義塾大、早稲田大などの大学の他、株式会社NTTドコモ、富士通株式会社などの企業が多数参加し、社会的に持続可能な学習基盤の構築を目指している。特徴の1つは、受講者の全ての学習行動を収集して分析し、教育改善に生かす仕組みを構築することだ。更に、世界的に教育効果が認識されつつある「反転学習」を取り入れ、その普及も目指す。14年4月、JMOOCの専用サイト「gacco」で講座の配信が始まり、順次拡大していく予定だ。



ジはどこか、どこでつまづいているのか、出来る学生と出来ない学生の学習方法の違いなどの情報が、教える側に全て集まる仕組みになっています。

現在の教育では、多くの場合、試験やレポートなどの結果で学習者を評定しています。ICTを利用したオンライン教育では、学習者の情報が指導者に随時フィードバックされるので、指導者は学習者一人ひとりの課題をリアルタイムに把握でき、全体指導と個別指導のメリハリをどう付けるかなど、講座を展開しながら授業を改善していけるのです。また、全ての学習者に関するデータを統計処理することで、多くの人が理解しやすい教え方はどのようなものかといった新しい指導ノウハウが、科学的な裏付けをもって構築できると期待されています。

## 世界中の人が利用できるよう講座をネット上で無料公開

「Online」の利点が明確なのに対し、意見が分かれるのが、2番目のキーワード「Open」です。無料配信で運営が成り立つのか。代表的なMOOCsである「Coursera（コースセラ）」と「edX（エデックス）」を比較してみましよう。Courseraは、ベンチャーファンドの資金を

基に営利企業として事業を推進しています。受講者から料金を取らない代わりに、企業に受講生の情報を提供することで、企業から情報料を徴収しています。多国籍企業が現地で社員を採用したい場合などに、その国の受講者がどのような科目を受け、成績はどの程度なのか、どこに住んでいるのかといった情報をCourseraから得て、優秀な人材の確保につなげるのです。

一方、edXはハーバード大とマサチューセッツ工科大（MIT）が中心となって設立したNPOが運営する非営利のサービスです。「大学の一流の講義を世界中の若者にオープンにする

ことが、高等教育機関の社会的役割である」という使命感が設立の背景にあります。MITは、01年から、大学で使用する教材をネットワーク上で公開するOpenCourseWare（OCW）に取り組んでおり、edXもその流れの延長線上にあります。もちろん、MITがモンゴルの優秀な学生に奨学金を出して自校に入学させた例があるように、各国の優秀な人材を発掘することも狙いの1つです。

アメリカでMOOCsが急速に普及した背景には、近年、州立大学で授業料が高騰しているという問題があります。経済的に苦しい家庭が頼る奨学金の中に、軍が担うものがあります。卒業後に一定年数、兵役に就けば、奨学金の返済を免除するという特例が設けられている奨学金制度です。この制度を利用して大学に進んだ若者が、卒業後に軍隊に入り、派遣先で命を落とすことが問題となりました。そこで、政府は、安価な高等教育を提供するために、MOOCsを後押しすることにしたのです。

「Massive」も、コストの問題と無関係ではありません。小規模の運営では採算が取れず、ビジネスとして成立しません。逆に、大規模な実験設備が必要な風洞実験のように、普通の大学では出来ない実験も、一度、コンテンツを作れば多くの大学が教材として共有できます。

一方で、対面授業と比較して、オンラインの講義によって、果たしてどれだけの教育効果が

やすうら・ひろと◎九州大理事・副学長、同産学連携センター長、日本オープンオンライン教育推進協議会副理事長。京都大大学院工学研究科修士課程修了。京都大工学部助教授、カリフォルニア大バークレイ校客員研究員、九州大大学院システム情報科学研究科教授等を経て現職。福岡県知的クラスタ創成事業CLUSS研究統括等も兼務。電子情報通信学会業績賞、情報処理学会フェローなど受賞歴多数。

得られるのかという疑問も提起されています。対面授業の場合でも、300人の前で話すのと30人の前で話すのでは、教育効果は変わるものです。ましてや、目の前に学生がいない状況で授業を行うことに、本当に教育効果があるのかと疑問を持つ方もいます。確かにそうかもしれません。しかし、MOOCsには大きな可能性が秘められていると、私は考えます。

## 日本独自のモデルをつくるために「gacco」をオープン

MassiveとOpenに関しては議論の余地があり、正直に言って、今後どう展開するかは分かりません。そうした状況下にもかかわらず、日本オープンオンライン教育推進協議会（JMOC）を産学が連携して立ち上げたのは、MOOCsが世界的に発展しているという流れに、日本が取り残されるのではないかという危機感があるからです。

日本では、新しいことを始めようとする際に、議論がある程度まとまらないと前に進めない傾向があります。もたもたしている間に後れを取れば、アメリカのMOOCsの技術が世界標準になり、将来日本で本格導入をする際に、全てアメリカのテクノロジーを使わざるを得ないことになりかねません。まずは、Onlineの技術を構築しながら、MassiveとOpenについては順次整えようと、14年4月、オンライン講座「g

acco（ガッコ）」の配信を始めました。

現在の講座の進め方は、次のようになります。受講期間は4週間。10分程度の講義映像を1週間に約10本配信し、受講生は講義映像を自分の都合に合わせて視聴します。受講中・受講後にテストやレポートを課し、講座で定められた条件を満たした人に修了証を授与します。これはモデルケースであり、現時点では、有効な方法を見付けるために、公の場で実験していると聞いた方が適切かもしれません。授業の内容や教材によって違う方法の講座も出てくるでしょう。受講料も、視聴のみは無料で、対面授業がある場合は有料、高校生の受講者は対面授業も無料など、さまざまな料金形態が考えられます。いずれにせよ、教育は持続可能であることが何より重要です。資金的に行き詰まったからという理由で講座を中止することがないよう、ビジネスモデルとして成立するかどうかを見極めながら慎重に進めていく考えです。

## オンライン講座は反転学習の新しい教科書

近年、教育効果が認められつつある「反転学習」の教育手法を確立することも、JMOCの狙いの1つです。

反転学習は、受講者が授業時間外にICT教材などを利用し、自分で基礎的な知識・技能を学んでから授業を受けることによって、学習内

容をより定着・深化させようとする方法です。好きな時に映像による授業を受け、小テストで理解度を確認してから、対面の授業に臨む。対面の授業は、映像による授業を事前に受けていることを前提に、探究的な内容に取り組んだりディスカッションを行ったりして、より深く内容を掘り下げていくのです。gaccoが公開している講座の中にも、4週間の講座のうち2週目と4週目に大学に集まって、グループ学習形式で対面の授業を行う「反転学習コース」があります。

オンライン講座は、反転学習における「新しい教科書」と位置付けられるのではないかと考えています。教室では実施できない実験や見せることの出来ない映像を盛り込んだ「教科書」であり、その教科書をどのように活用したのかという情報が教える側にフィードバックされる教育改善のツールでもあるわけです。

## 反転学習の普及によって学力観や教師像が変わる可能性も

ICTの普及に伴い、反転学習は初等中等教育にも普及する可能性があります。子ども一人ひとりの習得度や学習履歴に応じた教育が可能になることで、高校で課題になっていた学力の多層化の解決に向けた切り札になるとも考えています。また、オンライン講座を共有することによって、今までは優れた指導ノウハウと技術

を持つ教員だけが出来た授業を、他の教員も実践できるようになるかもしれません。

評価される学力の質も、変わる可能性があります。例えば、美術では、今までは手先が器用な生徒が有利だったかもしれませんが、3Dプリンターが活用できるようになれば、頭の中に描いたイメージを正確にデータ化できる技術を持つ生徒の方が評価される可能性があります。

教師像も変わることが考えられます。これまでは、生徒の内面の把握などは、経験豊かな教師でなければ難しかったかもしれませんが、それが、今後は、経験からだけではなく、学習履歴のデータなどから、生徒の悩みや心の動きを読み取る教師が出てくるのが考えられます。

ICTを活用した反転学習は、教育改革の起爆剤であり、教える側、教わる側の双方に大きな変革を促すものとなる可能性があります。

### 学問の多様性を失うリスクを回避する方策が必要

MOOCsにはリスクもあります。アメリカでも盛んに議論されていますが、MOOCsの普及の仕方によっては、大量の大学教員が失職する可能性があるといわれています。ハーバード大のマイケル・サンデル教授のようなカリスマ性を持つ教員に人気が集中し、他の哲学の授業は聞かなくてもよいといわれかねません。それ以上に危惧するのは、発信力を持った一

部の大学教員に権力が集中することです。そうなれば、多くの大学教員は、自身の研究成果や思想を発信する機会が著しく制限されてしまいます。1つのイデオロギーが別のイデオロギーをつぶしてしまい、学問の多様性を損なう危険性があるのです。特に、人文・社会系は多様性が大切です。マスコミの意見が「世論」と言われることがあるように、発信力を持つ人の言うことが正しいということになりかねません。今は「異端」と言われるような意見でも、ひょっとしたら、そこからもっと大きな新しい概念が出てくるかもしれない。そうした少数意見を守る仕組みも、併せて考えることが重要です。

### 世界に飛躍するきっかけをつかんでほしい

MOOCsは、高大接続のツールとしての活用も考えられます。例えば、高校生がgaccで講義を受け、大学ではどのようなことを学ぶのか、どの大学にどんな授業をする教員がいるのかを知り、志望大学・学部・学科を選ぶ材料とする。そのように、進路教材として活用できます。一方、大学にとっては、自校を意欲のある優秀な高校生に知ってもらえる機会となります。入学にもつながるかもしれません。

また、推薦入試やAO入試で合格した高校生の大学入学前の予習教材として、MOOCsを活用する可能性もあります。あるいは、AO入

試の受験者にオンライン講座を受講してもらい、入試の合格判定材料の1つとして使うことも考えられるでしょう。1回の試験ではなく、一定期間を掛けて、受験生が学びにどのように取り組んだのかという情報が得られるため、意欲的で優秀な学生を選抜することにつながります。将来的には、高校時代にMOOCsで受講した講座を、大学入学後の単位として認定し、飛び級が出来るようにする大学が出てくるかもしれません。

高校生の皆さんには、gaccを見ていただきたいのと同時に、CourseraやedXなどの海外のMOOCsも視聴して、日本の講座と比べていただきたいと思います。「アメリカの大学ではこんなに面白い授業があるのか、それならアメリカに行って勉強してみよう」という学生も現れるかもしれません。それは、日本の大学から見れば優秀な学生の流出ということになります。日本全体の人材の底上げという観点から見れば、必ずしもマイナスであるとは限らないと考えます。

日本の大学にとって、MOOCsは両刃の剣と言えます。しかし、海外の大学との競争が生まれることが、日本の大学にも刺激になり、教育全体の質を高める動きにつながることを期待しています。子どもたちには、ぜひMOOCsを活用して、世界に飛躍するきっかけをつかんでほしいと思います。

### 人間の感性と生地の属性を分析し 消費者が求める衣服を作り出す

信州大大学院 理工学系研究科 <sup>たかてら</sup>高寺政行研究室

人は自分の好みに合った衣服を選んで購入する。ただ、それはその人の感性によるものであるため、その衣服の何が、なぜ気に入ったのかを客観的に説明するのはなかなか難しい。感性工学とは、人間の心理と物質の属性の両面から感性を科学的に分析し、良い製品作りに生かそうとする学問だ。その第一人者、信州大大学院理工学系研究科の高寺政行教授は、企業と連携した研究を推し進めることが、研究成果を消費者に届ける近道であると語る。

#### フローチャートで分かる高寺政行研究室

##### 大学院生の 主な出身分野

感性工学

繊維学

被服学

など

◎主に織物や布地、衣服が研究対象の研究室であるため、繊維学部出身者が多い。韓国やフランスなど世界各国から留学生が集まっており、繊維産業の市場が巨大な中国からの留学生は特に多い。

##### 研究にかかわる 学問分野と研究内容

心理学・  
生理学

情報科学

感性工学

デザイン  
学

物理学

◎人間が製品に対して抱く、好き嫌いなどの感覚について、利用者の感想を収集し集計・分析するため、心理学や生理学、情報科学とかかわりが深い。研究室の主な研究対象が織物や布地、衣服であることから、デザイン学とも関連がある。また、物理学の知見は、製品の属性を把握するための武器となる。

##### 研究成果と 社会のかかわり

物性の解明

製品の  
評価・開発

など

◎調査・実験を通して、物質の持つ属性を解明し、このデータを蓄積・公表している。また、企業との共同研究などを通して、良さを追究した製品や、製品評価の方法を開発している。

## 製品の良さを論理的に分析する力が必要

感性工学が求める学生像

論理的思考力を身に付けた人

人を喜ばせることが好きな人

好きなことをとことん追究する人

感性工学では、製品がなぜ消費者に歓迎されたのかを解明していきます。製品が衣服であれば、物理学的な実験・調査を通して、快適な着心地や触り心地といった、多くの消費者に支持される長所がなぜ生じるのかを考えていきます。冷静に事実を見つめ、結果を論理的に分析することが求められるため、何よりも論理的思考力が欠かせません。この力を養うためにも、高校の数学にはしっかり取り組んでほしいと思います。

人を喜ばせるのが好きであることも、この学問の研究には必要です。実験・調査がうまくいかないことがしばしばありますが、だからといって途中で投げ出してしまっただけでは、研究が前に進みません。製品を買う消費者に喜んでほしいという気持ちがあれば、それが研究へのモチベーションとなり、根気よく取り組めるようになるはずで。

もう一つ大切なのが、自分の好きなことをとことん突きつめる姿勢です。新たな業績を上げる過程には、多くの失敗があります。追究しようとする強い意志がなければ、成し遂げられるものではありません。

### 高校生へのメッセージ

高校時代は、試行錯誤する経験を出来るだけ多く積んでください。最初から正解にたどりつけなくても、とりあえず取り組んでみよう、手を動かしてみようという姿勢がなければ、研究で成果を上げることは出来ません。失敗が許される学生時代に、何事にも積極的に挑戦してほしいと思います。



## 高寺政行 教授

たかてら まさゆき 信州大繊維学部繊維・感性工学系感性工学課程教授。信州大繊維学部卒業後、同助手、助教を経て現職。主な著書に『感性工学ハンドブック』（朝倉書店）、『はじめて学ぶ繊維（工業調査会）』『ファイバー工学』（丸善）、『繊維の百科事典』（丸善）、『感性工学への招待』（森北出版）などがある。日本感性工学学会賞技術賞、繊維学会賞、日本繊維機械学会賞技術賞、繊維学会論文賞などを受賞。

### 研究を志したきっかけ

## 人に喜ばれる着心地の良い製品を作りたい

感性工学とは、人々が製品に求める価値を探り、それを製品に付与する方法を追究する学問です。製造業界において、耐久性や機能性に加え、

高級感や清潔感といった人間の感性に訴える要素が重視されるようになった1980年代に、この学問は生まれました。あらゆる製品が研究対象となりますが、私は主にテキスタイルや衣服について研究しています。私は、研究者になるまでに時間が掛かりました。小さな頃から科学や技術に関心があった私は、生活必需品の1つである衣服について学び、人々の暮らしを豊かにしたいと考えようになり、繊維に特化した研究を行う本学の繊維学部に進みました。

大学院の修士課程では管理工学を専攻し、統計学を用いて製品を管理するためにコンピューターによるデータ処理に取り組みました。家庭の事情でやむなく中退し、その後、繊維学部の技術職員として、布地や織物を作る実習の技術指導に当たりました。

### 研究概要

## 心理的な評価と物理的な属性を関連付ける

88年に繊維学部の助手に採用され、テキスタイルや衣服の研究に本格的に取り組むようになったのです。私が助手になった当時は、繊維産業界にも感性工学の重要性が認識され始め、人々に喜ばれる生地を作るためには、ただ耐熱性や耐久性などの力学的性質を調べるだけでは不十分だと言われるようになった頃でした。工業用の商品は丈夫で長持ちすれば十分ですが、消費者向けの商品はデザイン性や着心地も優れていなければ売れません。自分の研究の成果を1日も早く消費者のもとに届けたいと、胸が高鳴ったことをよく覚えていています。

感性というと、感覚的で捉えどころのないもののようすがしますが、衣服に一般的に求められる価値、例えば着心地や触り心地の良さなどは、

生地の物理的な性質によって決まります。例えば、柔らかな手触りとは、伸縮性の高い繊維を低圧縮率で織った生地から得られる感覚です。この



# 着心地も見た目も満足する衣服を作るために

杉山千尋さん

すぎやま・ちひろ 信州大大学院理工学系研究科繊維・感性工学専攻感性工学コース修士課程1年。愛知県立半田東高校卒業。



**Q** なぜこの分野に進んだのですか

**A** 進路について悩んでいた高校2年生の頃、信州大のパンフレットを読み、繊維学部という学部と感性工学という学問があることを知りました。人が普段何となく感じていることについて学術的に解明するという学問内容に興味を持ち、受験しました。

学部卒業後は就職も考えていましたが、4年次に高寺先生の研究室に入ると、研究ががぜん楽しくなり、

考えが変わりました。大学院に入ればもっと深い研究が出来るという先輩のアドバイスもあり、修士課程への進学を決意しました。

**Q** 高寺先生の研究室での研究内容を教えてください

**A** ジャケットの着心地の良さ<sup>①</sup>と芯地との関係を研究しています。先輩による先行研究によって、芯地が硬いほど見た目が良くなる<sup>②</sup>ことが分かっていたのですが、着用した時の感覚についてはまだ研究されていませんでした。

そこで私は、4年次の1年間で、芯地の硬さによって着心地がどの程度変わるのかを検証しました。先行研究で用いた4着のジャケットを20人ほどの学生に着てもらい、着心地を聞き取る一方、ジャケットの生地<sup>③</sup>の伸縮性や曲げ特性などを科学的に測定したのです。その結果、見た目の評価が一番高いジャケット、つまり芯地が最も硬いジャケットは、着た時に最も強い違和感を感じる<sup>④</sup>ことが分かりました。芯地による着心地への影響はある程度あるだろうと予想していたものの、それほど顕著だとは思いませんでした。

見た目が美しくても、楽に着られないジャケットは良い製品とはいえません。今後は、着心地と見た目を同時に満足させ、更に形崩れしないジャケットを製作するために、芯地の形や強度を変えて実験を続ける予定です。理想のジャケットを自分の手で作りた<sup>⑤</sup>いと考えています。

**Q** 高校生へのメッセージをお願いします

**A** 高校生には、もっと学校を活用してほしいと思います。

高校生が接する大人は、家族以外では担任や学年団の先生、部活顧問の先生などに限られるのではないのでしょうか。学校には先生がたくさんいるのですから、他学年の先生とも積極的にコミュニケーションを取り

ましよう。性格や考え方が異なる先生と触れ合うことで、自分の視野を広げられるはず<sup>⑥</sup>です。

興味の幅を広げるためには、読書を勧めます。図書室を利用すれば無料でたくさんの本が読めますし、申請すれば読みたい本や雑誌を購入してくれる制度を備えた学校もある<sup>⑦</sup>ので、そういう支援があれば積極的に活用<sup>⑧</sup>しましょう。

また、英会話コンテストや合唱コンクールといった学校行事、地域のイベントなど、機会があれば何にでも挑戦してほしい<sup>⑨</sup>と思います。あらゆることに自分から進んで取り組む習慣を高校時代に身に付け<sup>⑩</sup>れば、自学自習が求められる大学生活を送る上で強力な武器になる<sup>⑪</sup>と思います。

## 私の高校時代

### 部活内の騒動から学んだ粘り強く取り組む姿勢

●高校時代は茶華道部に所属しました。私が部長を務めた3年次に、部内に問題が起きました。3年生2人の口論がきっかけで、部が2つのグループに割れ、「辞めたい」と言う部員まで何人が現れたのです。私は、部長として何とか解決しなければならぬと、家族に相談したり、教育関係の本を読んだりして、部を1つにするための方法を模索しました。

活動が毎日あるわけではなかったので、部員全員で話し合う機会はなかなかつくれません。そこで、一人ひとりの部員から話を聞き、不満を1つずつ解決していきました。すると、次第に部内が落ち着き始め、口論をした2人も「卒業まで一緒に頑張ろう」と言葉交わすまでになりました。

部内の課題に粘り強く取り組んだことが、実験結果に一喜一憂せず、冷静に調査を進める必要がある現在の研究に役立っている<sup>⑫</sup>と思います。

## 2014年度、文部科学省の新事業スタート

# 指定校同士で情報共有し活性化を図る 「スーパーグローバルハイスクール」

国を挙げてのグローバル人材育成の動きを受けて始まった「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」。これまでの事業と異なり、「幹事校」が設けられているのが特徴の1つだ。幹事校が果たす役割とは何か、SGHではどのような取り組みがされようとしているのか。幹事校である筑波大学附属高校に話を聞いた。

### 幹事校を設け、指定校の情報ネットワークをつくる

「スーパーグローバルハイスクール(以下、SGH)」事業は、政治や経済、法律、学術などの分野で国際的に活躍するようなグローバル・リーダーの育成を目的とし、語学力と共に幅広い教養、問題解決力等の国際的素養を身に付けるための教育に取り組む高校を指定し、国が重点的に支援する。国際化を進める国内の大学を中心に、企業や国際機関等と連携した取り組みを推奨し、高校段階から「世界」を体験させ、生徒のグローバル意識を高めようとしている。

2014年度の指定校は56校。他に、「SGHアソシエイト」という枠が設けられ、54校が選定された。申請数が多かったこと、SGH事業の構想をより多くの学校に広めていくという観点での措置だ。

これまでの支援事業にはない特徴は、指定校とSGHアソシエイトの計110校が「SGHコミュニティ」というネットワークを構築する点だ。幹事校に指定された筑波大学附属高校が中心となり、各校の活動内容や課題、成果などの情報共有を図る。それぞれの取り組みがより良くなるよう、同じ目標に向かって取り組みを行う学校同士が連携し、支援し合う体制を整えようとしている。

### 大学との連携を密にし 国際交流の事前指導を厚くする

SGHでは具体的にどんな活動を行うのか。指定校及び幹事校となった筑波大学附属高校に話を聞いた。同校は、近隣にある附属小・中学校と共に課題解決型授業の研究を進めており、ここ数年、国際交流にも力を入れてきた。それらの取り組みの狙いはSGHの事業目的に合致しており、指定を受ければ活動を深化・発展させる好機になると捉え、申請した。構想名は「小・中・高・大が連携した課題解決によるグローバル人材の育成」で、「国際性豊かなグロー

#### スーパーグローバルハイスクール(SGH) 事業の概要

- **目的** 急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高校段階から育成する。
- **事業概要** 国際化を進める国内の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材の育成に取り組む高校等を「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める。
- **指定期間** 5年間(2014～2018年度) ● **幹事校** 筑波大学附属高校
- **指定校数** 56校(2014年度、国立4校、公立34校、私立18校)
- **SGHアソシエイト** 54校。SGH事業を踏まえたグローバル・リーダー育成に資する教育の開発・実践に取り組む高校等を「SGHアソシエイト」として位置付けた。指定校と共に「SGHコミュニティ」を形成し、情報を共有する。

バル・シチズンの育成」「世界で活躍し社会を牽引するグローバル・リーダーの育成」を目標に掲げる。課題研究の内容は、「オリンピック・パラリンピックにおける諸課題」「地球規模で考える生命・環境・災害」「グローバル化と政治・経済・外交」の3つだ。日下部公昭副校長は次のように話す。

「本校では、全教科で課題解決型の授業を取り入れ、1・2年次は一部の科目を除いて必修とし、教養教育に



筑波大学附属高校副校長  
**日下部公昭**  
くさかべ こうしょう  
教職歴37年。同校に赴任して23年目。担当教科は世界史。

### 筑波大学附属高校

◎「自主・自律・自由」を教育モットーに、全人的人間の育成を図る。筑波大、附属小・中学校と連携しながら教育研究・開発に取り組む。

◎全日制／普通科／共学 ◎1学年約240人

◎2014年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大などに73人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ342人が合格。



筑波大学附属学校教育局次長  
**新津勝二**  
にいづ かつじ  
文部科学省初等中等教育局教育課程課課長補佐等を経て2012年から現職。

### 筑波大学附属学校教育局

◎11校の附属学校の管理機関として、大学も含め、附属学校との共同研究、校務の統括・調整等を行う。

も力を入れていきます。これら既存の教育活動を生かしつつ、筑波大と連携しながらグローバルな視点や課題解決力などの育成に一層力を入れる計画です。これまで国内だけに目が向いていた生徒にもグローバル意識を持たせ、生徒全員を『グローバル・シチズン』に育て、生徒同士が切磋琢磨する中で、リーダーとなるような人材を育成したいと考えています」

本年度の取り組みは、既に行っている4つの国際交流事業で派遣する生徒延べ約40人の事前・事後指導を手厚く行うなど、グローバル・リーダーの育成を中心に考えている。例えば、「アジア太平洋青少年リーダーズサミット」や「国際学術シンポジウム」では、気候変動や自然災害などの課題の研究を進め、その成果を英語で発表し、意見交換などを行う。これまでの英語科教員や研究課題に応じた教科の教員による事前学習の指導に加え、筑波大の協力を得て指導を行うと、日下部副校長は説明する。

「大学教員の専門的な指導により、知識や思考を一層深めた生徒を派遣することで、グローバル・リーダーの育成につなげたいと考えています。

更に、附属小・中学校とも連携し、高い課題解決力を持った人材の育成に取り組んでいきます」

次年度以降は、本年度の成果を基に「グローバル・シチズン」の育成を目指す事業を検討していく予定だ。

## 幹事校が共通課題やニーズを把握し、解決策を提案

幹事校としての役割は大きく2つある。1つめは、指定校・SGHアソシエイトの計110校が情報共有する場を提供し、「SGHコミュニティ」を構築することだ。具体的には、110校が一堂に会する「連絡協議会」を、年度始めと終わりの年2回開催する。更に、SGH専用のウェブサイトを開設。指定校・SGHアソシエイトの学校基本情報や事業内容を掲載し、各校及び関係機関が閲覧して投稿や情報交換が出来るようにする。また、各校の成果を公表し、一般からも意見を寄せられる「パブリックコメント」欄も設ける予定だ。同校を支援する筑波大学附属学校教育局の新津勝二次長は、こう話す。

「予算と時間の面から指定校が直接

集まれるのは年2回が限度と考え、専用のウェブサイトや日常的な情報交換の場にしていきます。そこでは、110校の多彩な活動記録が集積され、多様な意見も集まることでしよう。更に、大学や企業、研究機関だけでなく、一般からも広く意見を寄せてもらおうことによつて、各校の取り組みが活性化すると期待しています」

2つめは、連絡協議会やウェブサイトでの情報共有を図る中で、指定校に共通する課題やニーズを把握し、解決策を提案することだ。教育研究面と管理運営面の課題があると考えられるが、前者は附属高校が、後者は附属学校教育局が主体となり対応していく。場合によっては、指定校の課題をまとめて文部科学省に相談し、その結果を「SGHコミュニティ」で共有することもある。

「筑波大は国際化に重点を置いて教育活動を進めており、SGHも全学体制で支援していきます。今後は、指定校の生徒同士の交流、筑波大の留学生を交えた交流など、多様な人との交流を促し、豊かな人間性を備えたグローバル人材の育成に貢献したいと考えています」（新津次長）

シリーズ

# ウェブで参観できる 「授業大公開」がオープン!



英語

2014年2月14日公開

兵庫県立川西緑台高校 大目木俊憲 おおめぎ・としのり

## 生徒が「英語で考え、情報を得た」と実感できるよう、英語で授業を行う

### ◎導入の15分で「教科書を読みたい」と思わせる

私が初めて英語で授業を行ったのは、初任校1年目の時です。つまらなそうに授業を受けている生徒たちを見て、試しに英語で授業をしてみたのです。英語が苦手な生徒でも意欲的に取り組む姿を見て、私はその意義を感じ、それ以降、英語で行う授業のあり方について考えてきました。

授業で最も大切にしているのは、生徒に「英語で考え、英語で情報を得た」と実感させることです。そのため、生徒が「教科書を読みたい」と思うように、導入の15分に力を入れています。続いて、生徒が教科書の素材文を理解しやすくなるよう単語や熟語の確認をした上で、素材文の内容に関する質疑応答を行います。ここでは、素材文の最初の行についてから質問するのではなく、要点となる内容について聞いたキー・クエスチョンを投げ掛けます。全ての質問に答えた時に、生徒が素材文の内容をある程度、把握している状態にするわけです。

もっとも、英語で授業を行うことにこだわるあまり、生徒が正しく情報を理解できなければ本末転倒です。英語だけでは情報を伝え切れない場合、日本語で指示を出したり、日本語で考えさせたりするようにしています。例えば、今回の授業で扱った地雷の問題は、解決方法をしっかり考えてほしいと思い、英語で考えるのは難しいという生徒には日本語で考えるよう指示しました。

### ◎英語による授業は緊張感を生み、集中力を高める

英語で授業を行うメリットの1つは、生徒の集中力が高まることです。True or False や Q & A のように質問がパターン化してしまうと、生徒はそれに慣れ、次

第に集中力が低下していきます。しかし、英語で授業を行うと、生徒はどんな形で質問されるのかを予測できないため、緊張感が生まれ、授業に集中するのです。また、英文から情報を得るスピードが速くなり、英語力が向上する成果も見られます。

### ◎肩ひじを張らず、自分なりの方法で内容を伝える

英語の授業を英語で行うことに悩まれている先生にお伝えしたいのは、1行目から全て英語で話そうと肩ひじを張らなくてもよいということです。教科書の素材文の内容を最初から最後まで全て伝えるというスタンスから少し発想を変えて、自分なりの方法で素材文の内容を伝えてみてはいかがでしょうか。

私の授業を見ていただき、さまざまなメッセージをお寄せいただければ幸いです。

### ■大目木先生のティーチングプラン \*ウェブサイトでご覧いただけます

3. Teaching Procedure:		L:Listening S:Speaking T:Thinking			
TIME	CONTENTS/Activity	AIM	L	S	T
1st Segment (Introduction of today's story) 10-15min.	Oral Introduction of Today's story mainly in English small talk to make them think about what is important in the story by giving questions and making them answering those questions. to explain the points that the students should focus on in the story	To change in their brain gears from Japanese to English  To introduce today's topic and motivate them to read the story  To make them understand what the main focus of Today's story is	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	積極的に英語を使用して、今日のレッスンの内容を紹介する。(必要に応じて日本語を使うケースもある) 活動一 ①教師から話を投げかけ、質疑応答の活動の中で、理解、関心を深めさせる。 ②今日のレッスンの内容面を、重要なこと、ここを押さえて読んでほしいところを、できるだけ英語を使って理解させる。	1. 頭の中を、日本語から英語に変える準備をさせること。(今から英語で考えてみるという態勢を作らせる) 2. 興味・関心(今からこのトピックを読みたいという気持ち)を最大限に引き出すこと。なおかつ、英語で理解してみようという気持ちは喚起させること。 3. 語いの中で何に筆を置いて読めばいいのかを分らせること。  * この最初のセグメントで、「時間のレッスン必須」と思いが決まってしまう可能性が高い。			
2nd Segment (To make the students picture the meanings of the words and phrases in their mind) 10-15min.	To use the words & phrase sheet to make the students practice pair-work so they can picture	The ideal situation is the students picture the words' & phrases' meanings for sentence	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

アクセスはこちら！

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) にアクセスいただき、トップ画面右のメニューバーから「シリーズ 授業大公開」を選択してください。

教師全体の教科指導力を向上させるためには、指導内容・方法の共有が不可欠であり、共有の場として設けられるのが公開授業です。ただ、時間的・地理的制約などで誰もが参加できるわけではありません。そこで、ベネッセ教育総合研究所は、実際の授業を撮影した動画をウェブ上で発信する形で公開授業を実現しました。初回は2人の先生が登場。ぜひご覧いただき、ご自身の授業改善にお役立てください。

2014年3月14日公開

## 地理

神戸大学附属中等教育学校 高木 優 たかぎ・すぐる



# 個人思考の時間を大切にすることで、グループでの言語活動の効果を最大化させる

### ◎グループ学習と生徒との対話を組み合わせた授業

私は新任の頃から、生徒と対話をしながら授業を進める生徒参加型の授業を心掛けてきました。それに、本校が50年以上継承してきたグループ学習の要素を組み合わせたのが、今の私の授業スタイルです。

今回公開する授業では、ヨーロッパの中でも生徒が具体的なイメージを持ちづらい東欧について考察しています。教科書では、東欧はEUの中でも労働賃金が安く、労働力の供給場所と位置付けられており、日本の製造業も進出して西欧で売る製品を製造している、とされています。そうした理解が本当に正しいのかどうか、データを基に検証するのがテーマです。

私の授業では、自作のワークシートを使いながら、テーマについて個人で深く考える時間、仲間と共有して視野を広げる時間を設け、それを基に個人の考えを更に深めていくというプロセスを大切にしています。

### ◎個人学習とグループ学習の繰り返しで考えを深める

今回の授業を例にして説明します。まず、個人で東欧のイメージを考えてシートに記入し、続いてグループで、ヨーロッパ、アフリカ、ユーラシア大陸を中心とした3枚の世界地図を使って、東欧の地理的な位置付けを考えます。

次に最新の論文を提示し、教科書とは別の切り口から東欧の産業構造について考察します。グラフを丁寧にみると、東欧では確かに製造業は多いのですが、ポーランドにある日系企業の50%以上が卸売・小売業であり、東欧に近いオーストリアには日本企業の販売統括部門があることが分かります。これらは、東欧が労働力の供給場所というだけでなく、市場としても開拓が見込まれていることを示しており、そこに生徒が気付

けるかどうか、今回の授業のポイントです。

グループで話し合った内容をホワイトボードに書いて発表し、全体で共有した後、個人で本時の授業を踏まえて、東欧と日本との関係を100字程度の文章でまとめ、授業は終了となります。

言語活動を取り入れた授業は、講義型の授業以上に生徒の意欲を引き出せることが、テストの結果でも明らかになっています。同じ単元について、4年生(高1に該当)には言語活動を取り入れた授業、5年生(高2に該当)には講義型の授業と分けて行ったところ、4年生の方がテストの点数が良いという結果が出ました。

授業公開の際、私が意識しているのは、先生方が気軽に取り入れられる授業をすることです。これからも、先生方が「これならやってみよう」と思えるような授業を追究していきたいと考えています。グループ学習や言語活動を取り入れてみたいという先生は、ぜひ、本校へ授業見学にいらしてください。

### ■高木先生のティーチングプラン \*ウェブサイトでご覧いただけます

6. 本時の学習 (2次6時)																		
(1) 主題	【ヨーロッパの生活・文化】 東ヨーロッパと日本の関係																	
(2) ねらい	・東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。 ・これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。																	
(3) 教材観・方法観	東ヨーロッパは地表面での位置、自然的・人文的特徴がその成り立ちと変化、並びに日本との関係によって、生徒のイメージと大きくかけ離れている地域の1つである。一方で近年ますます、貿易や企業の進出、観光などの、人々の相互作用の関係が強まっている地域でもある。 その中で、様々な地図や資料を読み取ることで、イメージと現実との差違に気付く、[国際的な問題解決能力の礎となる情報リテラシー、考察力の向上を目指す。																	
(4) 指導と評価の計画	<table border="1"> <thead> <tr> <th>ねらい</th> <th>主な学習活動・内容</th> <th>評価方法と【評価基準】</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。</td> <td>スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。 グループで意見を交換し合い、発表する。</td> <td>ワークシートへの記入(提出)・内容やグループ活動の発言の様子から、「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。 【答】</td> </tr> <tr> <td>これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。</td> <td>これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてワークシートにまとめる。</td> <td>ワークシートへの記入(記述量・内容)から、「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し、自分の考えを述べているか」を評価する。 【思】</td> </tr> </tbody> </table>		ねらい	主な学習活動・内容	評価方法と【評価基準】	東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。	スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。 グループで意見を交換し合い、発表する。	ワークシートへの記入(提出)・内容やグループ活動の発言の様子から、「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。 【答】	これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。	これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてワークシートにまとめる。	ワークシートへの記入(記述量・内容)から、「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し、自分の考えを述べているか」を評価する。 【思】							
ねらい	主な学習活動・内容	評価方法と【評価基準】																
東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。	スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。 グループで意見を交換し合い、発表する。	ワークシートへの記入(提出)・内容やグループ活動の発言の様子から、「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。 【答】																
これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。	これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてワークシートにまとめる。	ワークシートへの記入(記述量・内容)から、「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し、自分の考えを述べているか」を評価する。 【思】																
(5) 本時の流れ	<table border="1"> <thead> <tr> <th>時</th> <th>学習の流れ</th> <th>生徒の活動</th> <th>指導上の留意点・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0</td> <td>時事問題の確認</td> <td>○最近のニュースについて発表し、確認する。</td> <td>○発表されたニュースに対して、簡単な解説を加える。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>本時の学習の主題と流れの確認</td> <td>○本時の主題とねらいを確認する。</td> <td>○本時の主題とねらいを確認させる。</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>東ヨーロッパのイメージについて「役割」を分担</td> <td>○東ヨーロッパのイメージについて考察する。 ○個人思考を踏まえ、グループ</td> <td>○本時の授業の流れについて確認する。 ○グループ内の役割分担について責</td> </tr> </tbody> </table>		時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価	0	時事問題の確認	○最近のニュースについて発表し、確認する。	○発表されたニュースに対して、簡単な解説を加える。		本時の学習の主題と流れの確認	○本時の主題とねらいを確認する。	○本時の主題とねらいを確認させる。	5	東ヨーロッパのイメージについて「役割」を分担	○東ヨーロッパのイメージについて考察する。 ○個人思考を踏まえ、グループ	○本時の授業の流れについて確認する。 ○グループ内の役割分担について責
時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価															
0	時事問題の確認	○最近のニュースについて発表し、確認する。	○発表されたニュースに対して、簡単な解説を加える。															
	本時の学習の主題と流れの確認	○本時の主題とねらいを確認する。	○本時の主題とねらいを確認させる。															
5	東ヨーロッパのイメージについて「役割」を分担	○東ヨーロッパのイメージについて考察する。 ○個人思考を踏まえ、グループ	○本時の授業の流れについて確認する。 ○グループ内の役割分担について責															

## センター試験試作問題の分析が参考になった

4月号の特集では、センター試験の試作問題を高校現場の視点で分析し、指導の展望が示されていた。私自身、授業進度や授業内容が手探りの状態だったので、大変参考になった。この特集を活用する教員は多いと思う。本校では理科の負担が大きく、生徒の学力をセンター試験レベルまで育てることが出来るか心配している。

〔静岡県・匿名希望〕

## 学校や教師が必要である意味を再確認

4月号の特集の座談会で、石川県立金沢錦丘高校の談話所啓輔先生は「身に付けた知識を言語活動を通して活用することで大学や社会で役立つ本當の学力になる」と言われ、広島県立忠海高校の有木克明先生は「言語活動はクラスメートや教師の存在があつて初めて成立するもの」と言われていた。インターネッで授業を受けることが出来る時代になつても、なぜ学校や教師が必要であるかの答えが集約されていると感じた。

〔岩手県立一戸高校・川村俊彦〕

## 「一点集中主義」に共感

4月号「指導変革の軌跡」で紹介された長崎県立諫早東高校が直面する課題は、全国多くの学校が抱えている。こうした学校を変えていくには、何より、まず「生徒指導の徹底」による落ち着いた学習環境づくりが求められる。その点で、「一点集中主義」は生徒と教員の共通理解と協力体制が築きやすく、効果も表れやすいと思った。また、年度途中に日

# Reader's VIEW

Volume 2

読者のページ

## 読者の先生方からのご意見を紹介します

課を変更して朝学習を導入したことや、その結果を踏まえて、新入生研修で学び直し教材「マナトレ」に取り組んだことなど、組織としての柔軟性や対応力が高い点も素晴らしい。同校の先生方には、変革の歩みを緩めることなく、地域から信頼される学校づくりを進めてほしい。

〔福井県立若狭高校・中森一郎〕

## 「志望校設定シート」で生徒の意欲を高めたい

本校では、毎年3年生2学期頃から推薦・AO入試の対策を個別に行い、2〜3週間掛けてやり取りしながら、「志望理由書」を完成させている。生徒は、書き始めより書き終えた時の方が、その大学に行きたいという気持ちが何倍も強くなっている。そういった意味で、生徒全員に「志望理由書」を書かせたいと思うのだが、ただ書かせるだけでは意味がなく、教師との問答が必要なので、時間がないという理由で出来ていなかった。その点、4月号「生きたデータの徹底研究」で示されたシートを使えば、「志望理由書」を生徒の意欲を高めるように、有意義に書かせることが出来るのではないかと思った。

〔福岡県・私立大牟田高校・荒木信一〕

教師川柳

勉強に部活に行事にフル回転

兵庫県・とんちんかん

## 『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「生きたデータの徹底研究」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



## 編集後記

◎特集の座談会で語られていた「自分を十分に見つめることが出来て初めて他者に目が向けられる」という点は、自分がまさにそのプロセスを踏んできたため、とても納得感がありました。ただ私は、自分を見つめることに大分時間を要してしまいましたが……。(柏木)

◎「生徒は、自分の意見をアウトプットできたことで自己肯定感が生まれ、社会貢献への気付きを得た」という特集記事での先生のご発言に、自我と社会性のバランスの取れた統合の必要性を改めて感じました。最後まで読んでくださりありがとうございました。(竹内)

VIEW21 6月号 Vol.2

2014年6月23日発行

発行人 山崎昌樹  
編集人 春名啓紀  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 中丸満  
撮影協力 南弘幸、ヤマグチイキ  
イラスト協力 カモ  
VIEW21編集部  
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング14階  
電話 03-5320-1215

©Benesse Corporation 2014

VIEW21

2014  
August  
8月  
Volume 3

次号は  
8月23日発行(予定)  
『VIEW21』高校版は  
年6回の発行です

# 思いを1つに

表紙の学校

高知県立岡豊高校 井上祐子先生

高知県立岡豊高校の部活動は熱い。毎朝6時半には各部が練習する大きな声が学校中に響き、放課後は、全体練習後に黙々と自主練習に励む姿が見られる。部の加入率は85%。運動系・文化系いずれも全国大会出場や県大会で上位入賞する部が多いことから、部活動のために入学し、1時間半を掛けて自転車通学する生徒がいるほどだ。

ただ、どんなに毎日練習に打ち込んで、全員がレギュラーになれたり全国大会に出場できたりするわけではない。それでもひたむきに頑張る生徒たちだからこそ、社会に大きく羽ばたく力を付けてほしいと立ち上がったのが、「生路部」だ。ここでは、生徒指導部と進路指導部、担任、学年主任、各部の顧問が情報を共有しながら、生徒の希望進路がかなうよう支援する。合言葉は「社会人のレギュラー」だ。進路指導部主任の井上祐子先生は言う。「部活動で培われる礼節や人間性は、社会で生きる上で大切な要素となりますが、生徒は部活動に集中しがちです。自分の将来を考え、その実現に必要な学力にも同様に意識を向けるよう、教師がそれぞれの立場から生徒に働き掛けています」。

井上先生は、来校した大学や企業の人から褒められたこと、指摘されたことを生徒たちに伝える。部の顧問は、補習が必要な生徒には補習に参加するように声を掛ける。教師の足並みのそろった指導は、生徒の意識を徐々に高めている。英語と数学の朝補習を毎日行い、放課後に週1回公務員講座を開くが、参加する生徒が増えてきた。「朝補習に参加して、難解な英語も面白いと思うようになりました」「将来のために何が必要か、真剣に考えるようになりました」と話す生徒たち。教師が一枚岩になって生徒と向き合う。その思いは生徒の心に届き、生徒の未来を変えていく。

## VIEW21

2014 June ● Vol.2

ビュー21 6月号 / 2014年6月23日発行 / 通巻第346号

発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

©Benesse Corporation 2014

お客様サービスセンター

[フリーダイヤル]

0120-350455

受付時間(祝日、年末・年始を除く)

月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社

〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17